

かざいと

福高ヨット部創部40周年記念号



福岡高校ヨット部OB会

福岡高等学校ヨット部々歌（讃歌）

詩 雄 幸 坂
曲 夫 信 吉

- 一、玄界灘に生まれたる
ヨットマンなら
男なら
太平洋に夢はせて
福高男児
ふるいたて
- 二、はらむセールを尚
引けば きしむ
マストのこゝちよさ
腕まえ見よと
タックジャイブ 夕日が
沈む 志賀島
- 三、だれか忘れん
霜月のりゅうかと
ばかり吹き荒れる
語る言葉も今はなく
恨みはふかし
博多湾
- 四、飛沫を肩に海の子が
みんな一度はあこがれた
海のなさけの
優勝旗今も思えば
目が潤む
目が潤む
目が潤む

福高ヨット部OB会

40周年記念シンボルマーク（表紙）

- セールと太陽に波、40の文字
- 3本の波型は、3つの学年の団結を表現

————デザイン：荒木デザイン

もくじ

I

創部40年に思う 福高ヨット部OB会会長 平畑栄一 1

II

40周年に寄せて 福岡高校校長 山廣恵 4

「伝統」ということ 福岡県ヨット連盟理事長 秋山雄治 5

創立40周年によせて 福岡高校ヨット部創部四十周年記念祭に寄す 6

福岡高校ヨット部創部四十周年記念祭に寄す 九州大学ヨット部OB 満武忠義 7

名島沖の回想 九州大学ヨット部OB 満武忠義 7

III

福高ヨット部「40年のあゆみ」

1. 第一期（昭和24～33年度）年表I

ヨット部誕生まで 初代部長 志賀史光 13

思い出す事 二代顧問 安東治 14

創部の頃の声 一 回 小山田修一 16

ヨット部創設の頃 二 回 岡藤博 18

「ヨット」我が青春!! 三 回 坂川福彦 19

創生期のヨット部の思い出 四 回 濱謙次郎 20

追録 五 回 吉積久幸 22

雑感 五 回 伊香賀亘 25

	廃部になりかけた第七回	七	大島康憲	27
	九回ヨット部の思い出	九	栗川賜郎	28
2.	第二期（昭和34～43年度）年表Ⅱ			
	名島城下の海岸にて	四代顧問	山田利幸	33
	ディンギーがあった時代	五代顧問	岩石泰忠	34
	合宿の思い出	十三回	安河内千洋	35
	全国制覇への第一歩	十五回	波多江慎吉	38
	あの頃僕も若かった	十六回	内屋雅行	39
	まぼろしの遭難騒ぎ	十八回	池田整昭	40
	現役時代の思い出	十九回	高須修平	41
3.	第三期（昭和44～53年度）年表Ⅲ			
	懐かしの福高ヨット部	七代顧問	野上一男	45
	入部当時の思い出	二十回	竹園良雄	46
	あの日、あの頃	二十一回	姫野芳英	49
	不思議な海	二十二回	市原徹志	51
	片レグコースのショートレグ	二十三回	真崎邦彦	52
	「超短篇・ジュンイチロウの青春記」	二十四回	泉義弘	56
	思うこと	二十六回	島田信二	57
	思い出探偵団	二十八回	川浪隆司	58
4.	現役時代の思い出			
	第四期（昭和54～63年度）年表Ⅳ			

IV

現 役 の 詩

ヨット部顧問の経験	九代顧問	和田守夫	63
何もできなかったけれど	十代顧問	高鳴徳久	64
ひょうたんから駒	三十一回	小阪元成	65
雑 感	三十四回	池内一誠	66
福高ヨット部の思い出	三十五回	旭俊哉	67
福高ヨット部で学んだ事	三十六回	山口隆	68
「三角波」の一節より	三十七回	内村祥史	69
A great future is reserved for us	三十八回	松原正信	69
現役時代を振り返って	三十九回	山本圭剛	71

活動状況について

顧問	中島良博	73
前キャプテン	中井信介	74
	片岡浩	75
	沖俊宏	75
	宮本幸彦	75
	川上武志	76
	池永玲子	76
	内村飛鳥	77
	今岡昌史	77

【二 年】

新キャプテン	77
--------	----

V

	住	所	録	【	一	年	】
3.	2.	1.					
現	O	学	校				
役	B	関	係				
.....
94	84	83		78	78	78	

山 瀬
内 戸
俊 宏
介 樹
.....
.....
.....

I 創部40年に思う

会長 平 畑 栄 一

昭和24年、同好会から発足した母校ヨット部が本年創部40年を迎えるとのこと、改めて時の流れに驚くとともに感激一杯の思いがあります。福岡で開催された第3回国体使用のスナイプ艇での発足でしたが本当によくぞ耐え成長してくれたものと思っています。

第一回生の私自身50才の人生の半ばを過ぎた現在、会員の皆様とともに創部40年の喜びにひたれる幸せでいっぱいです。

永い間、OB会の運営にたずさわらせて頂いた者の一人として感ずるまま40年間を振り返ってみたいと思います。

○創部期 九大・修猷に混じって

児島主将を中心とする九大ヨット部の指導の下に九大名島艇庫でスタートしました。所有艇は前述のスナイプ艇でしたが九大と同時に練習する事でスナイプ・A級ディングシー等を使わせて頂きました。第一回の合宿は修猷館と名島で合同で行いました。修猷OB安松氏（西南大卒）の暖かい指導も忘れられません。

当時、九大ヨット部では相当数の艇が米軍に接收

（雁の巣）されていましたが、この艇の返還に伴い艇の収容の関係から名島を離れ百道・地行・洲崎とジプシーが始まりました。また、米軍返却艇の中にスター、シックスがあり二艇の名島沖の並走を目の前にした感激が忘れられません。これと同時に九大保管の麻生先輩艇、A級2艇を頂き、改造艇を加え4艇の所有となりました。

○練習海域を求めて 博多湾ジプシー

九大名島艇庫を出てから母校ヨット部のジプシーが始まりました。砂の粗い百道・地行、国体漕艇々庫の洲崎、さらに箱崎・名島汐湯跡・香椎浜・大岳等々全てを思い出せない程「博多湾めぐり」をしたようです。しかし大岳を最後にジプシーも終り念願の艇庫の建設へと大きく前進しました。

○OB会の組織化 ぼんくら会

ヨット部卒業生として何となく顔を合わせていた関係からまとまった組織としてのOB会が昭和42年正式に発足しました。初の国体出場が大きなインパクトとなり、第5回生の吉積君などが積極的に動いて頂きました。また、吉積君の提案で「盆と暮れ」には会いましょうの思いを込めOB会のニックネームを「ぼんくら会」としたのも楽しい思い出です。

○末永隆一君のこと

昭和33年11月3日、練習中の末永君を失いました。

状況は「ちん（沈）」後校歌を歌いながら救助を待っていました。が海上保安庁の救助艇を目前に力尽きたとのこと。残念至極でした。当時OB会も活動が乏しく十分に対応ができずに家族の皆さんに何んとお詫びしてよいのか迷いました。毎年11月3日、追悼式が欠かさず行われている事で心の安らぎを覚えます。

また、この悲劇が以後のヨット部活動にとって大きな教訓となっています。

○全国制覇をめざして

母校卒業後、中央で活躍するOB会員も年とともに増加しました。とくに創設期に同志社大ヨット部で活躍した吉積君が博多湾に持ち込んだ「ベントティラー」（それまでは、少し長めのティラーにロープをつけて使っていた）は地元関係者に大きな衝撃を与えレベルアップに大きく貢献しました。また、慶応大ヨット部で活躍東京オリンピックの帆走委員をつとめた渡辺君（8回）も監督としての中央レベルの技術を習得させるだけでなく精神的バックボーンを植えて頂きました。また会員ではないにも拘らず監督として頑張った頂いた磯野君・加賀田君の好意も忘れられません。このような土壌の中でインターハイ優勝（昭45年）、国体優勝（昭46年）とつながりましたが、現在の時代に匹敵する活躍の話が少ない事を寂しく思います。

○ぼんくら一世号進水

香椎浜にて

OB会の組織的活動の第一歩として、OB会員の力による新艇としてスナイプ艇を購入、「ぼんくら一世号」と名づけ、ファミリーデーで多くのOB参加の下香椎浜で感激の進水式を行いました。新艇の運送などで頑張った今はなき高田政昭君（4回）の姿が目に浮びます。

○機関誌「かざいと」創刊

昭和44年、ぼんくら一世号の進水式で現役として感謝の辞をのべた石橋君（18回、ソリング級世界選手権大会出場）の提案で「現役とOBのパイプ」としての機関誌を作りその名も「かざいと」と名付けました。発刊も20号となり他校にないユニークな機関誌となりました。ヨット部生活体験者のみに通じるユーモア、感動があり読むたびに新鮮な気持ちになっています。

○待望の艇庫・合宿所 名島海岸

博多湾ジプシーも大岳九大艇庫横を最後に終わりました。昭和52年創部30年の記念事業の一環として念願の艇庫・合宿所がプレハブながらOB会の手で名島海岸（1回生、小山田君宅横、名島神社下）に設置することができました。土地所有者は名島神社横の宗栄寺でしたが今林住職の御好意で無償で土地の借用ができました。関係者多数参列の下テープカットをした感激もすばらしいものでした。

○事務局長さんたち

OB会組織の定着化とともに事務局を設置しました。ヨットレース以上に困難な状況の中で歴代の事務局長さんを始めスタッフの皆さんに頑張ってもらいました。40年間を支えて頂いた影武者でした。ほんくら一世から七世まで、さらに艇庫・合宿所の設置。毎年の総会・幹事会何から何まで皆さんの支えのお蔭です。本当に御苦労さまでした。

○活動拠点を小戸ヨットハーバーへ

念願の艇庫設置後十年余りでしたが、さらに新しい技術吸収、ライフボートによる安全性の確保等の問題から根拠地を小戸に移し、昭和61年4月艇庫を解体しました。ヨット部発祥の地で種々の思いを込めた名島艇庫で「時の流れ」と割り切ってはみましたが、胸一杯の思いで解体致しました。30周年の記念事業として設立に協力頂きましたOB会員の皆様ありがとうございました。

○ヨットへの情熱・母校愛・そして青春

40年間、種々の事がありました。今振り返ってみるとOB会員の皆様の一貫したヨットへの情熱、母校愛、過ぎ去った若き日への思い。このようなものが渾然一体となって種々のOB会活動を支えて頂いたものと思います。私自身卒業後も福岡に住みヨット部OB会に創部以来関与させて頂いた事をいましみじみと幸せに

思っています。第一回生の私どもがまだ現役として社
会人として活動中にこの40周年の式典・祝賀会等を企
画頂いた関係の皆様方に深い敬意とともに感謝の意を
表させて頂きます。

創部40年、OB会員の皆様は勿論、学校当局、歴代
の部長先生、ヨット県連関係の皆様現役諸君とその活
動を支えて下さった家族の皆様、母校同窓会関係の皆
様等々、余りにも多くの皆様に支えられて今日に至り
ました。ただただ感謝の念で一杯です。

福高ヨット部・OB会とも今後さらに茨の道を歩き
続けることとは思いますが、さらに御指導御鞭撻の程
をお願い致しまして創部40年の所感とさせて頂きます。

(平成元年七月十五日)

II 40周年に寄せて

「伝統」ということ

御挨拶にかえて

福岡高校校長 山 廣 恵

梅雨明けも間近く、まさにヨットの季節の到来といえましょう。

本年、いみじくもヨット部は四十周年をむかえられ、そう、誠におめでとうございます。一口に四十年と申しましても、その長年にわたる歴史の中には様々な栄光と共に、幾多のご苦労もあったことでしょう、それらを全て陰から支えてこられたOB会の御尽力はひとかたならぬものであったろうと拝察いたします。さて、この春、この脈々たる歴史を有する福岡高校に赴任してきて感ずることは、行事の折はもちろんだが、日々の教育活動の中にも見え隠れする、有形無形の伝統の陰です。とはいふものの、その「伝統」とはいかなるものかと改めて問い直してみると、それはなかなかつかみにくいものです。ただ、本校の部活動の状況に目を向けてみますと、後輩にたいする先輩方のなみなみならぬ御配慮には目を見張るばかりであります。特にヨット部についてはその競技の特殊性ゆえに、コ

ーチング及び経済面までの御支援を厚くいただいているということに感謝の念に耐えませぬ。斯様な本校の有様をみていると、こういった先輩方の後輩に対するおもしろいやりというものが、「伝統」という一筋の糸となり、先輩後輩をつなぐ絆として連綿とつらなっていくのだろうと思えてきます。

となれば、後輩である現役諸君はその先輩方の思いというものを真摯に受けとめ、また引き継いでいかねばならないと思えます。ただ憲政の神といわれた政治家の尾崎行雄の言葉に “The stage is provided in the future.” (君の活躍の場は、将来に用意されている) というものがあります。この言葉は将来への限りない可能性を暗示するとともに現状に甘んずることなく励め、との意味をあわせもっているように思えます。この言葉を借りるまでもないことですが、伝統の継承ということにおいて、現役諸君は伝統の上に安住することなく、また、それに押し潰されることなく進取の精神をもって果敢に前進することが肝要でしょう。それがこの伝統ある福高ヨット部のさらなる発展につながっていくことだと思います。

最後にOBの方々のさらなる御厚情と、福高ヨット部のますますの発展を祈念して、わたくしの挨拶とさせていただきます。

創立40周年によせて

福岡県ヨット連盟理事長 秋山雄治

ヨット部創立40周年心よりお祝い申し上げます。
ひと口に40年と申しましても、人間の年令にたとえれば熟年の期と言われるものですから、高校ヨット部としては日本有数の歴史を誇る福岡高校ヨット部であると言えましょう。

特に福岡高校の場合、海に遠く地理的条件が非常に悪いのに、これほど迄に発展し、活躍してこられたのは、OBの皆様の強力なご支援とご尽力の賜物だと私は敬意を表するものであります。

40周年を祝い、その歩みを振りかえり、懐しみ、歴史を大いに語り合い、そしてこの40周年をステップとして又大いなる発展を期することも有意義なことと思えます。

そこで福岡に於ける各高校ヨット部の現況をながめてみると二つの大きな問題点があるように感じます。

- (一)は競技力レベルの低下
- (二)部員の定着が悪い。そして卒業後はヨットから遠ざかる。

先ず(一)については立派なヨットハーバーが出きたの

に反比例して福岡の高校のレベルは低下している。

これは、適切な指導者の不在が考えられ以前に比して若いOBの指導が少ないようである。又、慢性的な全国大会での不振により、レースに勝つ事に対しての価値感が低下してきているのではないだろうか。

又(二)についても、日常の練習が時間だけが長くかかり、効率的でないのかもしれない。これは以前に比してヨットの解体、セール、スパーク類の材質、性能、すべて格段の進歩をとげたのに日常の練習方法たるや十年一日の如き感があるので改善の余地が大いにあるであらう。

又、三角レースの練習のみに終始し、ディンギーで能古島や志賀島、糸島半島等へのディクルージングに出かけて海水浴、キャンプする等のレース以外のヨットイングの楽しさ、素晴らしさを味わう機会が非常に少いと考えられる。現在日本ではマリンレジャーに対して非常に関心が高まりつつある時期に、折角ヨットに親しもうと若い少年達が集ってきているのに、ヨットイングの楽しさ、素晴らしさを感じ得ないで3年間を過すのは非常に残念で勿体ない事のように感じます。

この様な高校ヨット部の問題点を放置することなく、積極的に現状を打破し、部活動を活性化させていけるのはOB会以外に考えられません。

折角希望して入部して来た現役諸君です。レースの

素晴しさ、クルージングの楽しさを十分に味わせて卒業させてやりたいものです。

私も同じ様な高校ヨット部OBとして、機会ある毎にこの様な課題に努力して見たいと思います。貴OB会におかれましても40周年を期して、現役諸君の部活動の活性化に対して、尚一層のご支援を賜り九州地区のリーダー校として、大いに高校ヨット界を引張って頂く事を期待し、お祝いの言葉といたします。

『福岡高校ヨット部 創部四十周年記念祭に寄す』



修猷館高校ヨット部 二十五年卒
西南学院大学ヨット部 二十九年卒

安松正美

創部四十周年記念祭、心からお祝い申し上げます。この七月初め、福高ヨット部OB会より福岡高校ヨット部創部四十周年記念祭へのお誘いの連絡を頂き、あれからもう四十年と、わが年令をも顧りみず驚き、懐しさと嬉しさと胸一杯となり、昔日のことども思い出した次第です。

昭和二十三年、戦後まもない荒廃した世相の中、第

三回国民体育大会が福岡県で開催され、ヨット競技は志賀島で実施されました。

当時は、名島の九大が中心で、旧制の福高と中学修猷館が百道で細々とやっていたのですが、全員動員され一丸となって協力、大成功をおさめたのです。

少し話しは遡りますが、この国体に使用する艇として、A級十二呎ディンギーは九大の新艇が十六杯ありましたが、前年日本ヨット協会規格艇として新たにスナイプ級が採用され、九大OBの待鳥さん、今村さんを中心に須崎（現在の競艇場附近）に九州ヨット工作所が設立され、ここで十艇、それからグライダーを諦めた田中丸治広さんの研究所（伊崎浦）で三艇建造されたのです。

この九州ヨット工作所に、学生ヨットには合わない九大から回わされてきた、フィリップロードスのペングイン級（マルコニーキャットの十二呎）が五艇ありまして、博多湾でのヨット普及のためとか気取って、ウィークデイの放課後四〜五人でよく遊びに行っていました。その時知り合ったのが新制福高の井上博氏（新宮町光和建设）と渡辺渡氏（西中洲筑前綱屋）なのです。

九大の帽子をかぶった高田さん、黒木さん、それから旧制福岡女専の栗山女史など、クラブを作ろうとか、工作所のWダイヤゴナル機帆船モデルを利用してスク

「ナーにしようとか、また床下のカンナクズの中に巣を作ったりワイワイガヤガヤ……」思い出しますね。

結局、修猷組はレース指向として名島で九大のお世話になり、部員を増していったのです。

昭和二十四年、旧制福高は新制九大となり、国体の使用艇払下げの話となった時、折角の機会だから西南大、福岡大、福岡高にぜひヨット部を、との構想から大学は九大、高校は修猷から勧誘するということになりました。それから私と棚町、千葉の三人で福高を訪問、伊之坂先生、井上、渡辺両氏に熱心にお願ひし、福高ヨット同好会結成のはこびとなりました。

福岡大は、ヨットの合同会議の時はいつも二名出席してあったのですが、なぜかその時は実現できず発足が十年程遅れることになったのです。

結局、田中丸製のスナイプ、三一六号艇が西南大、三一七号艇が福岡高、三一八号艇が修猷館と割振りが決まり、それぞれの部活動の基礎となったのです。また九大OBの麻生典太氏の肝入りで、同氏が所有されていたA級十二呎ディングー二艇の寄贈を頂いたのも嬉しい限りでした。

古いOBの面々、名簿でみるのも懐しく、また、堀田、大島、高田氏の逝去の文字は、言葉にならない悲しさと淋しさをおぼえ、時代の流れを感じています。まだ、思い出話は沢山ありますが、次回五十周年の

時に披露したいと考えております。

名島沖の回想

九大ヨット部OB 満 武 忠 義

福高ヨット部創部40周年お目出とうございます。突然、同OB会事務局より記念誌に投稿を、との依頼がございました。光栄とは存じつゝも当時の記憶も甚だ怪しくなっておりますので、お引受すべきか、否かと迷いました。思案のあげく、当時の名島海岸の模様などを思い起し乍ら、私自身の懐古の情の一端を綴らせて頂いて、役を果たしたことにさせて頂きたいと存じます。

その頃、九州水域でヨット部を擁していたのは、九州大学以外では修猷館、旧制福岡高等学校、旧制第七高等学校及び西南大学等でありました。修猷館を除いては何れも創部後未だ日が浅い学校ばかりでした。これらの学校のヨット部は九大ヨット部の指導のもとに名島沖でレースの練習に明け暮れておりました。当時、私は九大ヨット部の学生であり、福中出身でありましたので創部当時の方々には特に親しみを覚えて接触していた事は今でも記憶に新しいところであります。九

大艇庫の前に池田さん（？）と言うお名前のお宅があり、そちらの軒先か何かに福高ヨット部の艤装品を預けておられていた様な記憶も幽かにあります。間もなくして潮湯の方に移られ、数年経たない中に名島海水浴場の丘側にプレハブの立派な艇庫を建設されて、以後部活動が益々充実された様に思い起されます。

創部当時の名島沖は、周辺の埋立地が全くなくて満潮時には辨天島と帆柱石の間も帆走が出来ましたし、九電の名島火力発電所（現在は九電運動場）も健在で、その四本の大煙突はクルージングから帰投時のよき目印でありましたし、石炭運搬船のために航路も浚渫されており、正三角形の航路標識に従って帆走すれば干潮時でも楽に名島艇庫に帰着することが出来ました。

当時の公式レースは全て九大の艇を借用して、運営も九大ヨット部員及びそのOBの手により行われておりました。当時の九大の所有艇は、国際12呎A級ディングー・18隻、スナイプ級・4隻、20呎級・2隻等と豊富で日本一の規模でありました。それらの艇を使用して、海上で乗廻し方式でレースを行っておりました。今にして思えば、実に和気霽々たる雰囲気でした。

その後、学校・実業団のヨット部の創設も相継ぎ、九州水域に於ても鹿児島湾、大村湾、芦屋海岸（福岡県）、別府湾等でもレースが行われる様になり、博多湾に於ても名島沖以外の百道海岸でもレースが行われ

る様になりました。レースに参加するチーム数が増えれば、運営するのも大変な仕事になって参ります。関係者の間で、ヨット・ハーバーが欲しいの想いが高まって参りました。ヨット普及のためには是非ともハーバーを建設することが我々ヨットマンの夢でした。色々陳情したり、運動はしましたけれども、建設費は多額を要することから、話は聞いて貰えても、到底、実現は望めそうもない時代が長く続きました。

九州水域でも福岡以降に国体が開催された地域では全てヨット・ハーバーが建設されました。別府湾、鹿児島湾、大村湾そして唐津湾等で次々に建設され、何れの地区に於ても国体開催とハーバー建設を契機にヨット人口が急増し、レースの技術水準も著しく向上する様子を見て、私達は大変羨ましく思うと共に、その反面九州ヨット界のために非常に嬉しく思っておりました。

昭和48年の高校総体が福岡で開催されることが決定されたのを絶好の機会到来とばかりにヨット関係者が県と市に猛然と働きかけて、遂にヨット・ハーバーが小戸に建設されることになりました。高校総体時に仮オープンして、昭和51年4月にプレハブ・ハウスで正式にオープンの運びになり、現在の立派なハウスが完成したのは昭和54年も秋風の立つ頃でした。ハーバーの完成を迎えた時のヨット関係者の喜びは筆舌に

尽し難いものでありました。以来、諸々の全国大会も開催出来る様になり、ヨット人口は飛躍的に増大し、クルーザーも数多く繋留され、外洋帆走も活発に行われる様になり、海外諸国との交流レースも盛んに開催される様になりましたことは、誠に喜ばしい限りでございます。福高ヨット部創立の頃のヨット事情を知る者にとっては将に今昔の感に堪え得ないところであります。

私事で誠に恐縮ですが、昭和52年4月に私の長男博詩が福高に入学することが出来ました。私の強い勧めに従ったのかヨット部に入部させて貰い皆様に大変お世話になりました。一年生の頃は練習日毎に傷んだセーラーを持帰り、本人は勿論、祖母、伯母、妹及び私の家内と家族の女性軍総掛りでセーラーの繕いに精を出していたことも、今では我が家の楽しい思い出の一つになっております。本人はよく針を持ったまゝ居眠りしておりましたが、忍耐心と愛艇心を培うのには大変役に立った事だと思っております。三年生の9月の国体が済むまでは受験勉強もまゝならず、大学入試には些か支障を来した様でしたが、大学時代もヨットを続け社会人となった現在でもヨットから離れていない様です。長男にヨットを勧めたことを、私はヨットマンとして誇りに思っております。今後とも、二世、三世のヨットマンが数多く誕生してヨット界の発展のために

活躍して頂きたいと念願いたしております。

最後になりましたが、福高ヨット部並びにOB会の今後益々の御発展を衷心よりお祈り申し上げます。

Ⅲ

福高ヨット部
「40年のあゆみ」

第
一
期

昭和
24
～
33
年度

- 生きるので、勢いっばいの時代。(2回 山路)。
- スローガン“修猷館に勝って国体に行こう”意気盛ん。(3回 大原)。
- 2年生が中心となり、艇はなけれど意欲さかん。(7回 大島)。

福高ヨット部沿革（第Ⅰ期）

年度	記 事	顧 問	主 将	部 員 数	艇	艇 庫
24	◎秋「福高ヨット同好会」発足 ・九大ヨット部にお世話になる。 （当時九大キャプテン児島氏） ・名島「奥の家」にて合宿 ・初沈（新木・岡藤組）～箱崎沖	志賀先生 ↓	1回(2年) 関 屋	2年 8人 1年 3 計 11	S級1 (国体私下) (A級借用)	九大艇庫に問 借 伊 崎 洲 崎 箱 崎
25	・文化祭で教室にA級ディンギー 展示。 ◎麻生典太氏より、A級2杯いた だけ。 (部費 2～3万円)		1回(3年) 関 屋	3年 7人 2 3 1 5 計 15	S級1 A級3	
26	◎部に昇格(4月) ・百道海岸に定着	安東先生 ↓	2回 岡 藤	3年 3人 2 6 1 4 計 13	S級1 A級3	百 道 ↓ 九大艇庫 ↓ 名 島 (1回小山田宅 に艇装品保管)
27	・志賀小学校合宿で、食あたり、 下痢のまま、国体予選出場 修猷館に近差で惜敗。 ・部員数も増え、活気みなぎる。		3回 坂 川	3年 6人 2 4 1 8 計 18	S級1 A級4 ※ペンギン (1回波多江氏 製作中)	
28	・国体予選にて、快走にもかかわらず 失格に泣く。(スナイプ級)		4回 高 田	3年 4人 2 8 1 1 計 13	S級1 A級2	
29			5回 伊 香 賀	3年 8人 2 1 1 4 計 13	S級1 A級2	
30	・名島合宿にて、A級沈。沈上げ の、坂川(OB)、大寺、雁の 巢米軍キャンプまで流される。		6回 大 寺	3年 1人 2 4 1 2 計 7	S級1 A級2 (廃棄)	
31	◎A級新艇進水(前田造船所)		7回 大 島	3年 1人 2 10 1 6 計 17	S級1 A級1 (大破) (新艇) S級1 (新規借用)	
32	・国体予選で、西南高に惜敗。 ・階段下の部室 (部費 3万円)	8回 渡 辺	3年 9人 2 6 1 5 計 20	S級1 A級1 (他に老朽 艇あり)		
33	◎11月3日、10回生 末永氏 練習中遭難	9回 関 本	3年 7人 2 3 1 3 計 13	S級1 A級1		

ヨット部誕生まで

初代部長 志賀史光（現大分大学長）

もう四〇年も昔のことだから、記憶もさだかでないし、忘れてしまったことも多いが、当時をふり返りながら記憶の糸をたどることにする。

事の起りは化学準備室からである。着任当初（昭和二二年十月）は二階の理科教官室に他の先生方といっしょに机を並べ、神妙に控えていたが、そのうち独りで準備室にもる時間が増え、それにつれて生徒たちが三々五々休み時間や放課後など、何とはなしに集まってくるようになった。秀才もおればワルソードもいる。戦後の物の無い時代であったが、ヤミ市から何かしら食い物を仕入れてはやってくる。教室では伺い知ることのできない旺盛な生活力である。

この準備室での雑談のなかで、化学に興味を持った生徒からは化学部を、ヨットの話しを身を乗り出して聴いていた生徒たちからはヨット部をつくろうではないかということになった。化学部の方はすんなりと話がついて認められたが、ヨット部の方はなかなか話が進まない。

理由は、まず第一にヨットが一隻もないこと、第二

に遭難の危険性があること、第三に私がまだ若僧で学校の信頼を得ていなかったことなどである。第二の点は多分に誤解があり、海をよく知れば絶対に安全であることを種々力説し、第三の点もあわせて説得したが、問題は第一の点である。当時の若手教官、社会の花谷君、数学の安東君、音楽の江口さんなど、全面的にバックアップしてくれて、体育の伊之坂さんや教頭に波状攻撃をかけてくれた。しかし何といても、学校を動かすもとなったのは、「何がなんでも」といった生徒たちの熱意であった。

それで第一の問題が目鼻がつけばというところまでこぎつけたが、これが難題である。何とかして練習するヨットをということで、九大に再三掛け合ったが、九大では艇が老朽化している上に、戦時中から修験館に数隻のディンギーの使用を認めているので、それ以上の余裕がないなどの理由で話しが進まない。ところが窮すれば何とやらで、このようなとき、福岡国体で使用したヨットを大学や高校のヨット部に無償で払い下げるといふニュースが入ってきた。まさにチャンスである。早くヨット部をつくらなければ、他の学校にもっていかれる。事は急を要する。「ヨット部を認めなければ、私も花谷も学校はやめますばい」と強談判。生徒たちも側面から波状攻撃。とうとうそんなら「同好会」ならばということになった。昭和二十四年

の秋のことである。

スナイプとディンギー二隻を申請したが、実際に払下げられたのはスナイプ一隻であった。ディンギーについてはすでに九大等に払下げることになっているので九大と相談せよということである。九大キャプテンと話しあった結果、ディンギー一隻についての使用を黙認する。艇庫は自分の間名島の艇庫を間借りしてよということになった。

さあ、いよいよスナイプの受け取りである。当時国体のヨットは那珂川左岸河口の艇庫に保管してあった。生徒のうち誰と誰がついてきたかは忘れてしまったが、三々四名の生徒と共に名島へとスナイプを走らせた。生徒たちにとっては皆ヨットに乗るのは始めてである。どんな顔して乗っていたか。秋も終りの頃で曇天ですら寒い日であった。途中で化学部の研究用に石堂川の水をサンプリングすることになっていた。河口に近づくにつれて風波が強くなり、河口では三角波が立ち風が渦を巻いていた。セールが安定しない。おまけに始めての連中ばかりだから、バランスをとることを知らない。セールはばたつき安定を失って今にも沈しそうになる。「バランスをとれ、アカを汲めノこら皆で移るやつがあるかノ」悪戦苦闘の末やっとの思いで河口を脱した。今思い出しても冷汗ものである。このようにして生れたヨット部であるが、あれから

すでに四〇年、その間数々の業績を積み重ね、今や伝統を誇る立派な部として成長している。昭和二六年、あとを安東君に託して大分に来たが、生みの親より育ての親である。今日のヨット部は歴代部長ならびに多くの先輩部員に支えられ、築きあげてこられた結晶である。それらの方々に感謝の念を捧げながら筆を擱く。

平成元年七月

思い出す事

二代顧問 安東 治

私が志賀先生の後をつぎ2代目のヨット部長をつとめた3ヶ年間幾多の思い出がありますが今でもヨット部ときく度に思い出す事を述べてみたいと思います。それは夏期休暇中、志賀島の小学校をかりての合宿を終り、2艇のディンギーと1艇のスナイプに荷物をつんで名島の艇庫を目ざして志賀島を出発しました。能古島の島かげを過ぎて、博多湾の真中に差しかけたとき、突然ブロウにおそわれ舟首から海水が入り出しました。私はアカクミで必死に汲み出していました。ふっと後をふりかえると最後尾の艇は百道方向にもう一つの舟は箱崎方向に流されています。私の艇も

ふり返る余裕はなく、一刻も早く名島について救助をたのむことしか手段がありません。

やっとの思いで名島につき、九大の20フィートで救助に向うことになったとき一隻は百道に到着とのしらせで箱崎に残りのヨットの救出に向いました。

結局全員無事で一名の人身事故もなくすみました。若し一名でも事故が起っていたら部の歴史も短く、何等の実績もないヨット部はどうなっていたらうかと思っと思っています。その後のヨット部の輝やかしい歴史を考えるとき、今でも思い出しては事故が無くてよかったですと思っています。

ヨット部の今後のさらなる発展を祈ってやみません。



スキッパー安東先生 クルー5回山本



志賀島にて
安東先生 上マーク廻航

創部の頃の事

一回 小山田 修 一

今年で福高ヨット部創立四十周年を迎える事になる
感覚としては、その時間の経過が、ピンと来ない、と
云うのが、実感である。

先日、同期の小河亀彦君と数年ぶりにお逢いする機
会を持つ事が出来たが、彼は、高校卒業以来ずっと東
京住いと云う事もあって、久しぶりのヨット談義は、
更にその感深しと云う事であった。

「かざいと」の原稿依頼を受けて、改めてその時間
をふり返っている次第である。

昭和廿四年、第三回国民体育大会が福岡の地で開催
された。現在の平和台競技場（アンツーカーのトラッ
クは当時日本で初のものだったと記憶している。）を
メイン会場とし、県内各地で、スポーツの祭典が繰り
広げられた。

この年の初冬、国体で使用されたヨットのうちスナ
イプ級の三艇が、福高、修猷、西南の各校に払い下げ
られる事になったのが、そもその部創立のきっかけ
となったものである。当時三年生は時間的な問題もあ
り、我々二年生が主体となって動き始める事となる。



左から小山田、出利葉、志賀先生、岡藤
国体払下げ艇とともに、名島九大艇庫

修猷館は既に海洋少年部の一環としてのヨット部が
あり、西南学院にも大学に既にヨット部が活動して居
りおまけに百道海水浴場が学校のすぐ裏にあると云う
好条件に恵まれ、独り福高のみが全て0からの出発で
あった。

スナイプ一艇のみの出発の中で何よりも我々に幸い
した事は、初代部長、志賀史光先生（現大分大学々長）
の存在であった。先生は、修猷館、九大ヨット部に在
籍されて居た事もあって、非常な御理解を戴き、特に

創立当初は体育部としては認められず同好会として発足した事もあって、予算の捻出、九大ヨット部との接渉について、御苦労を戴いた。

第二に幸運だった事は、当初艇庫がない為名島の九大ヨット部艇庫に間借りする事になったが、時の九大ヨット部キャプテンが、児島氏で、福高の先輩であった事である。ヨット各部の名称、ロープの取扱い、帆走の原理を三角定規を使って教えて戴いたり、甘フィートに乗せて戴いて初の帆走をさせて戴いた。



波多江 岡藤
小林 小山田
小河 安東先生
平畑 出利葉

昭和廿五年、相変らず艇は一艇のみ、何とか艇が欲しい。“我々の頭脳に浮かんだ案は簡単である。先輩に寄附をお願いしよう。”この名案はすぐに実行された。亡き長敬一郎校長先生（当時教頭先生）にお願いし、紹介状を書いて貰った。行先は飯塚麻生邸。当時麻生産業副社長、麻生典太氏を訪問する。（麻生典太氏は九大ヨット部OBでもあった。）麻生邸を訪れた我々は、先づその大邸宅に度肝を抜かれる。麻生氏は本宅との事。同一敷地内にある本宅に廻る。応接間に通された我々を心良く迎えて呉れた副社長にお願いする。結果はデインギー二艇。「名島の九大艇庫に置いてあるヤツを、あげるよ。」それで決りである。しかしその後云われた「それにしても君達は度胸がいいナア。俺一人の所に来るのはひどいぞ!!」との言葉は今にしても忘れる事が出来ない。度胸がいいよりは、むしろ無鉄砲。今思うだけに冷汗が流れる。これも若さのしからしめる結果か。

その他、数々のエピソードを思い出す。

なぜか、文化祭に参加した事。石堂川を逆のぼり、石蔵屋の横から学校の二階の一室にデインギー一隻を展示。学校に泊り込んで準備をしたものだった。

又、名島の海岸は遠浅の為ラダーがつかえて仕方がない為、学校の近所の鉄工所に折りたゝみ式のラダーを製作してもらったものゝ金がない。事情を聞いた鉄

工所の主人が、全部無料にしてくれたり——。つい先日
の事のように思われる。

今年は何部四十年の節目の年。来年は、再び福岡国
体を迎える。時も場所も、舞台は出来上っている。再
び全国制覇に向って頑張つて欲しい。学校スポーツは
心身の鍛練は勿論の事、その結果としての勝利を掴み
とる事に目的があると思う。後輩諸氏の健斗を祈る。

ヨット部創設の頃

二回 岡 藤 博

昭和二十四年の年の暮れも間近い頃、わが校にヨッ
ト部が出来ることを、ポスターか何かで知りました。
当時、一年生であつた私は、同じクラスの鬼木君
と計り、連れだつて、薄暗い化学教室に集まつたこと
を記憶しています。そこには先輩である、平畑、小山
田、小林、小川さん達が神妙な顔をして座っておられ
たのも記憶しています。(その後、二回生として、山
路、出利葉君が入部してきました。)

入部の動機としては「人がやらない事をやってみよ
う」という、チャレンジ精神だったと今でも思ってい
ます。(敗戦間もない当時としては、ヨットなど別世

界の存在でした。)

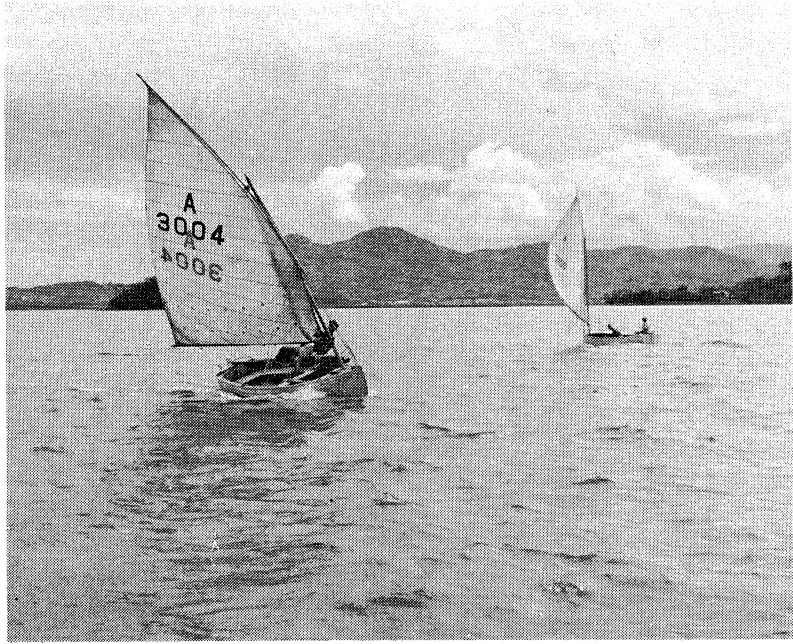
さて、部長の志賀先生(独身の青年教師)からヨッ
トの素晴らしさを聞き、ワクワクしながら、数日して名
島の九大艇庫で、九大所有のヨット(20フィート)に
乗せてもらった感激は、今でも忘れ得ません。

九大の艇庫を間借りしての活動でしたから夏の合宿
は、米を持参して、名島の旅館「奥の家」でやりまし
た。非常に安い料金だったものですから、来る日も来
る日も、玉ねぎの味噌汁がおかずでした。旅館の軒先
には、われわれの合宿に備えて、玉ねぎがずらりと鈴
なりにぶら下げてありました。

真夏の炎天下、過酷な練習の毎日でしたから、たち
まち栄養不足を来たし、数日すると小便は真赤になり、
とうとう鳥目になってしまいました。(夕暮れになつ
て外に出ると、全く足下が見えないのです。私にとつ
て貴重な体験でした。)

合宿によって心のきずなが結ばれ、チームワークが
しっかりと固まりました。今から考えると個性豊かな面
々の集まりでありました。

初めての「沈」も思い出です。名島沖で、新木先輩
がスキッパー、私がクルー、艇はディングイーで、二人
とも新米。おまけに追い風一杯ときて「沈」をする条
件は十分にそろっていたようです。舳先から艇が波の
間につっ込んで行った光景は、今でも脳裏に鮮かです。



名島沖

情けない気持ちで波間にただよっている間にも潮に流されて名島発電所の煙突（当時、九電の火力発電所があった）が段々小さくなって行くのです。どうなる事やらと思っていると、エンジンの音勇ましく、箱崎の漁師さんが近づいて来て救助してくれました。後日一升びんを下げて先輩がお礼に行かれましたが、ヨット

トを通して、学校では学べないものを数々学んだと思います。
よき先輩、よき後輩と共に、名島の沖に青春の情熱を燃やした。福高ヨット部の思い出は、この言葉に尽きると思います。

「ヨット」 我が青春!!

三回 坂川 福彦

私とヨットとの出会いは化学部への入部から始まった。初代部長の志賀先生が化学部の部長でもあったこと、そのためヨット同好会の発足に際し第一回の先輩達と先生との話し合いをいつも見聞きしていたことから、ヨットの方が面白いようだと言ふことで鞍替えしたのだった。

そのヨットだが私にとっては五十五才の今日迄自分の人生のバックボーンとして心の支えにもなりその影響は大きいものがあった。特に卒業後は福岡を離れることが多くなり最近ではほとんど大阪で暮す様になりましたが故郷から遠くに居るほど思い入れは強くなって来ました。

ヨットに関わる思い出は言い尽くせぬほど数多いが

次の二つのことは特に印象深い出来事だった。

まず、三年最後の対抗戦で修猷館に破れ国体出場が果たせなかったこと。それはまことにきわどい点差であり微妙な抗議問題等を含め大変悔しい出来事だった。その試合に焦点を合わせ直前迄志賀島で合宿を行ないその余勢を駆って闘いにのぞんだが、合宿所での食中毒で、弱り切った体に腹巻きにカイロの悪条件での試合となってしまった。それでも結果は予想以上で一時代我方が優勝かという場面もあったが西南高からゴール後大幅な時間経過にもかかわらず抗議が出されそれを受理され惜敗したのだった。この件については二代目部長安東先生が色々と各方面に事情を説明され判定の不明朗さを訴えられました。が受け入れられなかった。この試合の運営は九大生のほかは修猷館OBだけというきびしい状況は、より多くの優秀な先輩達がおられる現在からは到底想像もつかないことだと思います。もう一つは卒業後三年ほど経た夏の名島合宿に参加した時のことだ。或る日一年生二人の乗ったディンギーが沈し大分流されているとの報告を受けキャプテンの大寺君とすぐ救助に向かったが風も強く波も高くなってきたので四人乗りでは到底帰えれないと判断し、交替する形で沈したヨットに残り弱り切った二人を先に帰らせ救助を頼ませたが予想以上の波と潮流に救助隊も私共を発見出来ず、とうとう昭和鉄工沖合から西

戸崎迄流れてしまい結局米軍キャンプ沖で米兵に救助されたのだった。その後の人生で精神的には幾度となく死ぬ思いをしたが肉体的に死ぬかと思っただのは今のところこのときが最初で最後である。十六才から十八才という多感な時代にヨットと、それに関わったすばらしい人達との出会い、本当にヨット部に入って良かったとつくづく思っている今日この頃です。

創生期のヨット部の思い出

四回 濱

謙次郎

あれから、何年になるか、指折り数えるのも大変なくらいの歳月が流れた感じがする……恐る恐る、ヨット部に入るため部室を訪れたことが……。

たしか、昭和二十六年（一九五一年）の五月であるから、もう三十八年も昔になる。

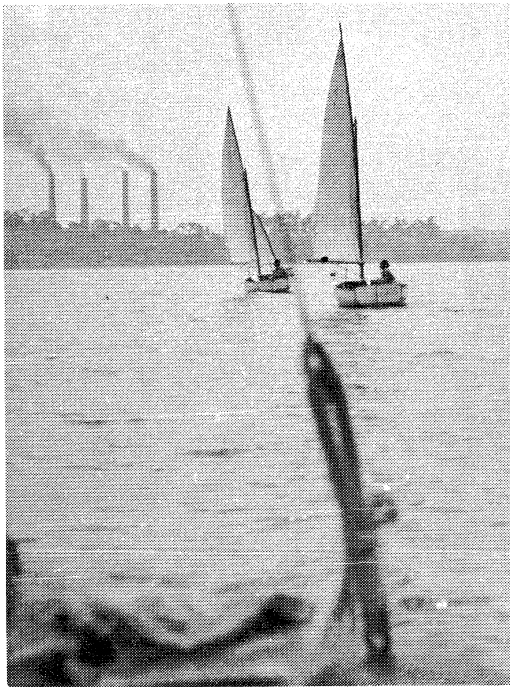
当時の、福高はスポーツ全盛時代でラグビー、バスケット、テニス、ボクシング部といった全国的に実力屈指の花形クラブがめじろおしだった。ヨット部は、まだ歴史も浅く、花形クラブに対して地味な存在であった。また、当時は、ヨット人口も少なく、入部する

ことは、一種の冒険であった。一年生には同じ組から先にヨット部に入っていた、高田（故人）と高野（二年で退部）がいた。この二人に誘われて入部したわけであるが、入った理由は覚えていない。

入部して初めてヨットに乗った時、福高ヨット部は名島の九大ヨット部に間借りしていた。このときヨットなど絵本で見るといって全然知識もないので、先輩の鈴木さんからいろいろと優しく教えてもらったことを、昨日のように不思議と思いつく。その時のキャプテンは、岡藤さんで人望厚く、統率力も抜群であった。夏の合宿練習も名島の旅館を借りていた。当時、名島には、九電の発電所があり、高い煙突が立っていた。この煙突は、見る場所によつて、二本や三本に見えたりしていた。また、九電に石炭を運ぶ鉄道も敷かれ、名島も住宅が建ち並び環境は一変してしまった。いま都市高速道路が、私達が練習を終えて歩いた道の上を近代的な装いで偉容を誇っている。練習を終えて西鉄名島駅までの日暮れて暗くなった道程を、小遣い銭を出しあい、パンや駄菓子をほうばってわいわい言いながら歩いた思い出が脳裏を走る。

二年の時、キャプテンが坂川さんになった。明るく大胆な中に密なところがあり、チームをまとめていった。この年、河原と辰巳が入部し、ヨット部の層が厚くなった。彼等は素晴らしい素質を持っていて、そ

の後の部の発展に非常なる貢献をした。たしか、ヨット部歌を作ったのは、彼等と記憶する。また、ユニフォームも、たしかこのとき作ったと思う。夏用は、黒い半袖のシャツで、白い紐で胸もとを結び、なかなかしゃれたものだった。秋用は、ラグビーのに準じたものだった。この年の夏は、志賀島小学校を借りての、合宿を行なった。志賀島といえば、食中毒を思い出すが、この時は、不思議とサメが、近海に出現し練習中の我々のそばを、ひれをたてて、悠々と波を分けて泳いでいた。しかし、恐怖感など全然なく、先輩の方がより恐ろしかった。特に、OBの先輩は神様みたいな存在だったので、誉められでもしたら、有頂天になつ



名島沖、火力発電所煙突

たりした。この合宿の後、国体の予選が、百道沖で行なわれ、私は、高田とデインギーに乗って出場したが、惜しくも西南高に一位を奪われ、涙した。そして、その後、高田がキャプテンになり、これを機会にして、福高のヨット部は、実力をつけてきたと思っっている。

冬期は、シーズンオフで、練習はなく、石堂川をオートルを使って遡り、福高の近くまでヨットをもつてきて、学校に運びここで修理をして、次期シーズンに備えた。予算面も苦しく、新艇の補充など夢又夢だった。とにかく艇をいかに現状維持し、来年度に持ちこたえさすかが課題であった。そのため、艇に無理が来ないように置いて置かねばならないし、水もりがないようにするため、パテつめ、ペンキぬり、セールの補修な



伊香賀 辰巳 吉積
坂川 山本
高田 大原
濱 鈴木

ど大変であった。とにかく、当時は、ヨット部にとつて創生期であり、物はなかつたが充実した毎日だった。その後、時が流れ、私は、教職の道に進み、図らずも現OB会事務局長の斉田雅夫君を教える機会に巡り合せたのも何かの縁であろう。

追 録

五回 吉 積 久 幸

現 大分大学学長 志賀史光先生は知らない。二代部長安東治先生の頃である。

名島の火力発電所の四本煙突が三本煙突になった頃は定かでないが進駐軍没収の九大のスター級、二〇フィート級が戻され浮いていた。先生、貧乏世帯を養う為に寄附モライに往ってあった事がある。

部 費 二万円 昭和二十九年
現部費 二十万円 昭和六十三年
十五回坂口幸雄、波多江慎吉時代
昭和三十八年十八回山口国体初出場

遠征費の一部を捻出すべく照雲神社、阿曇志賀島町々長に陸上競技部（通称シカ）こと福高七回三浦桂稜を通じて「おとひめ丸」を金一万五千円にて借用、「博

多那ノ津会」のお歴々に三味、太鼓、鼓、擦証の鳴り物を頼み、加えて西南大学のハワイアン・バンド「潮風のデート」なる券発行金七百円也で飲み食い放題の納涼船を出帆した。筑紫女学園、福岡女学院の人達に札売りに走り廻ってもらったものである。

一回小山田修一先輩は居た。ふる手OBの中からそげなことせんでも銭だけでもらえばよいとの声有りと聞くに及び「じゃかましい」と売上金は現役にやらずに世話人の腹の中に霧と霞に消化した。これを機にOB会なるまとまりの姿を現わし始めたのは事実である。ボン(盆)とクレ(暮)になけなしの銭の喜捨を頂戴しボンクラ一世(盆と暮が一緒に来たごと大さわぎする者をボンクラと云う語原に基き)進水させたのが十八回石橋真一の時代である「かざいと」も彼達の時代から誕生した。

福中廿五回廿六回卒業生(フトコロ会)

塾長川添さん 栄光と伝統に輝く…と始まる名司会池田、材木屋黒岩、棟梁平山他、多士才々が来ちゃんなざった。八回渡辺晏友人、故中西紀之君から大成建設実業団艇を寄贈してもらうやら、ぼんくら号も七世を数えたと記憶する。百道の西南大艇庫火災に逢っても不思議に一世のトランサムだけは焼け残って置った。

名島神社分院 筑前琵琶奉納社の宗栄寺住職

福高には土地借さんがヨット部なら借そうと名島小

山田邸から始めて汐湯、香椎花園浜、一九回高須修平時代艇庫の屋根造りに森本、実渕、篤、鳥飼、岩瀬当りの姿が見えた。

撤去するとき月桂樹の木を月桂冠の頭輪を戴くだろうと植林しといたがその後無かった。何処かで育っている筈である。大きくなつとろう。

志賀島、西戸崎 etc…ジプシー艇庫生活も帆柱亭ナメ裏に建立、落着くことが出来た。

護岸工事時も、ヨットの出し良かごと防波堤切るべきと申入れして戴いたのも住職である。

二十一回伊藤元晴、藤木芳人、斎田雅夫、姫野芳英、真鍋龍二、湯川隆志時代に、十一回蒲郡全国高校ヨット選手権大会に優勝した事がある。監督福大OB磯野和憲である。奴だけ泣きながらプラットホームから下りて来たのが印象的であった。県知事亀井光さんところへ戦勝報告。廿二回フランスの英語教師を嫁にした久保山立民、田代剛、市川靖雄、松山輝光、市原徹志、尾園潤一時代。

第二六回和歌山国体優勝した時でもあった。

年年歳歳花相似 歳歳年年人不同

ラグビーの門田久人体育部長、面倒見る先生のおらんけんヨット部を廃部するとか休部するとか云いよんになると聞く「こんな」と。

敷島太郎校長に一回、平畑会長四回、故高田政昭五

回、吉積(子)、八回渡辺、直接談判に行った事もある。三十年代六回、防衛大学の犬寺慰弘七回、大食いの大島康憲、北岡正幸、八回渡辺晏……以降、決して手はあてなかったが肥ビシヤク特練が強行されていたものである。

十回末永隆一君、昭和三十三年十一月三日練習中遭難事故、多大の人に迷惑を掛けた。

遺体捜査に博多湾漁船の人達舟首にチャボを乗せて「コケッココ」^コと鳴けば「此処ヨ」^コと教えるとか、五回石村順吉の兄貴、修猷館(ディンギー級三年連続九州選手権者)、西南大ヨット部在部本柱でやって戴いているとか、琵琶の湖上で聞いた。

「どうせ死ぬならヨ 千尋の海でヨ 波の花咲くヨ 青い海でヨ (青い墓場でヨ) 四番ある ッ友情の歌」^コとして同志社ヨット部部歌の中に生きたる赤い提灯の火が消えたのも三三年三月三日、現産大教授福岡県ヨット連盟会長柳ヶ瀬勉氏、当時九州帝国大学帆艇部現役であろう。

昭和二三年第三回福岡国体(一回京都、二回金沢)帆走委員用の米の「買い出し」^コ闇米で捕まえられ、「米」没収されっぱなしか取戻されたかは知らないが食い物で苦労されたは必條。

平成二年は四十五回福岡国体の年でもある。

合宿所は名島「奥の家」であった。米持参一升五合、

タマネギがずらーとぶら下がっていた。これが味噌汁のネタ、下がってない時は具なし。練習終ったの合宿所帰りは四ツ足で石段を這い上る、夜盲症に掛っているからである。

一回波多江正、ぜんざい鍋、砂糖かサッカリンか知らんが小豆の泳ぎよる汁、あまかった。これが後の豪傑鍋、フーテン鍋と移り進む。

オオナベ(甥)友人の柔道部福高十回、藤原正樹、柔道部のOBからは「何ん事ヨット部の面倒ばかり見ちゃるとか」とおごられるとか。

「籠手ですテコたいと云うときやい」と云って、十回外様大名島本俊臣マトンの足を冷蔵庫から引張り出すやら、同期稲石幸雄んとこのサンマや鮭を頂戴したものである。

三回鈴木仁、志賀島合宿所廻航途中捕えたる鱸(セイゴ、フッコ、スズキとなる出世魚)

さしみで全員食ったものだが天我ニ味方セズ、国体予選日前日管崎浜に打上げられるやら下痢やられて、三回坂川福彦時代は壊滅した。

四回高田政昭時代「カーリーのヨット戦術」なる原書を読ませられたと云うか研究したのもこの頃。追順風差、マストアビームたら云うルール条項はずい分後から出来たもの。

縁とは異なるもので、七福連と称すどんたく隊(福高

七回卒生厄年から始めて今年で十四回目）、「加たりやい」と廿八回渡辺昭博と（当時婚約者現女房）参加して流した。奴が私の父の腑分け執刀したのも何かの縁である。先輩後輩の縦糸と同期生の横糸を織り合わせるのと良か布になるスポーツ振興会の事について振れて置こう。

新艇庫開きの時福中十一回（福士会）故冬司堅太郎氏 ッヨットてえのはそげんゼニの掛るとや」と動かれたのが振興会の起りであり、当年活躍した部に福中高総合同窓会（恒例六月第二日曜日）席上奨励金の一部として元金、金利をやろうと始したのである。初代会長福高四回重松通保、二代七回穴井毅、三代九回庄島厚生、四代十四回泉原淳一と続いている。スポーツ基金は、ヨット部の為、作っちゃんなったようなもんぜ。勝たナ 奨励金が泣きよるぜ 大儀名分があれば ッぼんくら号 位かませる筈である。

ッかざいと 〃も二十才
ッ部歴 〃も四十才

時計廻りにするか反時計廻りにするか知らんが事務局長斎田雅夫よい、OB会会則原点通り、相互の親睦を計り現役に金銭的にバックアップするの一言である。一打、マキ直してみ見てんやい。

平成元年七月十五日 博多手一本

雑感

五回 伊香賀 巨

創部40周年と知り、もうそんなにと驚くと同時に入部したての頃の30数年前のことが、なつかしく思い出される。中学時代は野球漬けで高校でも当然待望の硬式をやろうと半ば決めていた小生、泳ぎも出来ないのに何んでヨット部に入る事になったのか。中学時代の先輩の紹介、勧めもあったが何と云っても決め手は、二年先の国体が北海道であり高校の部は修猷、西南学院と共に1/3の確率で出場出来る可能性があると聞かされた事であった。

当時九州以外に行った事も見た事もなかった小生にとって、北海道での国体は何にもまして大変な魅力であった。中学時代一度は大島商船にも進もうかと思つた程の海に対するあこがれの感情も一緒になり一も二もなくヨット部入部を決めてしまった。新入生の頃は、当時の主将坂川さんの指導を受ける機会が多くこれがその後高校大学とディンギー級でおし通す結果となった。部にはディンギーが2ハイ、スナイプが1パイとそれも相当老朽化した艇しかなかったが、ヨットというものとの最初の出逢いであり今でも鮮明に当時の艇

の姿を頭の中に描くことが出来る。名島の九大艇庫横の小さな砂浜に引きあげられた艇、小山田先輩の庭先をお借りしての艤装の収納、海水に濡れたパンツを我慢して帰る勝田線、思い出せばきりが無いが、高校3ヶ年のヨット部活動は充実しており今尚青春の思い出としてかなりの比重を占め残っている。

同期の吉積、山本、石村君等の諸兄と共に頑張った当初の目標、北海道国体出場の夢はその後無残にも打砕かれ果すことは出来なかったがそれなりに意義ある3ヶ年であった。大学2年の時、第13回夏季国体、琵琶湖大会に幸い出場する機会を得て、貴重な経験をすると共に入部以来の夢を実現することが出来た。これも一重に先輩等のお蔭だと感謝している。当時同志社大ヨット部に在籍の吉積君にはセールの貸与を受けたり何かと面倒をかけた。この様に、様々な思い出をたどるとどうした訳か殆んど楽しかった事だけしか甦って来ないが、小生にとって悲しい思い出として唯一先代主将故高田先輩との出逢いと別れがある。故高田先輩には高校、大学を通して随分と御世話になった。非常に面倒見のいい人で、ことヨットに関しては狂がつく程熱心であった。時にはレースのことで口論もしたが本心にヨットを愛した人だったと思う。早くに病に倒られたがもし今でも元気でおられたならば、必ずや福高ヨット部に対し大きな力になっていたただけの方だ

と思うと残念でならない。

社会人になって以来全くヨットに乗る機会もなく厳しい現実との闘いに明け暮れる毎日であるが毎年新人が入社し話しをする機会に、

(i) 辛かったことも先では楽しい思い出となって返って来る。

(ii) なんとかしようという気持を持ちつづけ、目標をもって挑戦して見る。

(iii) 勝負はやはり勝たなければならない。

などいささかおこがましいがヨットでの教訓を話したり、レースの本当のおもしろさを話してやったりしている。

かく云う小生も50の大台を越え体の具合も気になる歳になって来たが健康に留意し、今後の人生をより有意義なものにし度いと思っている今日この頃です。

最後になりましたが、今回めでたく創部40周年を迎えるに当り、平畑OB会長始め創部時ご尽力いただいた諸先輩に対しあらためて感謝の意を表しますと共に福高ヨット部の益々の発展を祈願して雑感とさせていただきます。

廃部になりかけた第七回

七回 大島 康 憲

創部四十周年、おめでとうございます。

とりとめのない事を書きますが、「へエーこんなこともあったのか」と読んでいただければと思います。

三十年前のヨット部時代の記憶をたどると楽しい事が数々浮んで参ります。私が入部した時は伊香賀主将の時代で、吉積先輩、山本先輩をはじめ多士済々の時代でした。練習海域は、名島で、艇庫もなく、艀装は小山田先輩宅の庭に保管していただいていた。保有艇は、スナイプ一艇（国体払下げ）、ディングー二艇（麻生典太氏の御寄附・かざいと二十号小山田先輩の文に詳しい）であったと思います。しかし残念な事に私の時代に、この三艇共失ってしまい、ついには廃部寸前に追込まれてしまいました。記憶をたどりながら、「廃部になりかけた第七回」として、書いて見ます。

扱て、私が入部した当時は、前に書きました通り、ヨット部の繁栄時代でしたが第六回生は、大寺主将只一人、又第七回生も実質的には私一人、と部員数も減少していました。艇の内ディングーは、老朽化が激し

くパテ詰め等の補修をしても、常に滄洩れ、底の「外板のすき間から海が見える」と云った状態で、追手帆走を後から見ると、艇体がよじれ、何時こわれるかと思える程になり、廃棄のやむなきに至りました。又三年生となった春、九大艇庫横のポンドにアンカリングしていたスナイプが、強風の為、走錨し、同じ所にアンカリングしてあった九大ボード部のフィクス二艇と岸壁の間にはさまれ、右舷半分が、バラバラとなる大破、ついに創部以来の艇が全滅してしまいました。丁度その頃、生徒会委員の中で、クラブの活動の悪い部の廃部が持上り、ボクシング部、登山部、ヨット部の三部が対象となりました。生徒総会にかけられる前に、何とか対象からははずす様、会長、書記等委員に頼みに行きましたが、聞いてもらえず、総会にかけられる事となりました。総会では、対象各部の主将が、存続のお願いをし、又参会者から、廃部、存続の各意見が出され、最後の決となる訳ですが、級友や他のクラスの友人等に存続の意見を発言する様依頼、又第八回の渡辺君等の努力で二年生の意見も存続にまとめる等して、決ではヨット部のみ存続、と決りました。又存続が決定した後になります。各部の予算申請にディングー一艇の新造を申請、予算委員会では他部の主将達から、猛烈な反対に合いながらも、当時柔道部の主将であった、新宮松比古君や友人達の応援で、無事新造予算が

認められ、前田造船で新造しやっと一艇丈保有する事になりました。その後、渡辺君達の努力で、スナイプ一艇を何処かで見つけ無償で借りて、練習する事となりました。

今当時は振返ると、創部時以来の先輩の方々から引継ぎながら、廃部になりかけ何とか後輩に引継ぎ、今日の四十周年の繁栄を見る事が出来諸先輩を始め、現役の方々に至る諸先輩の方々に心から感謝する次第です。

九回ヨット部の思い出

九回 栗川 賜郎

誰しもが同じ様にまだ心軟かき時の体験はいつまでも心に残り、消える事がない。

我々の時は、名島の小山田先輩の庭先に、間借りしておりました、マスト・セールを、ブロック塀に片屋根つけた所に、収納していました。今から思えば、ろくに挨拶もせずにかつてに庭の扉を明けて、あたりまえみたいに使っていた事を、申し訳なく思い出されます。部長は青柳先生で一方ならず大変御世話になりました。主将は関本（スナイプ）、大金（ディンギー）、

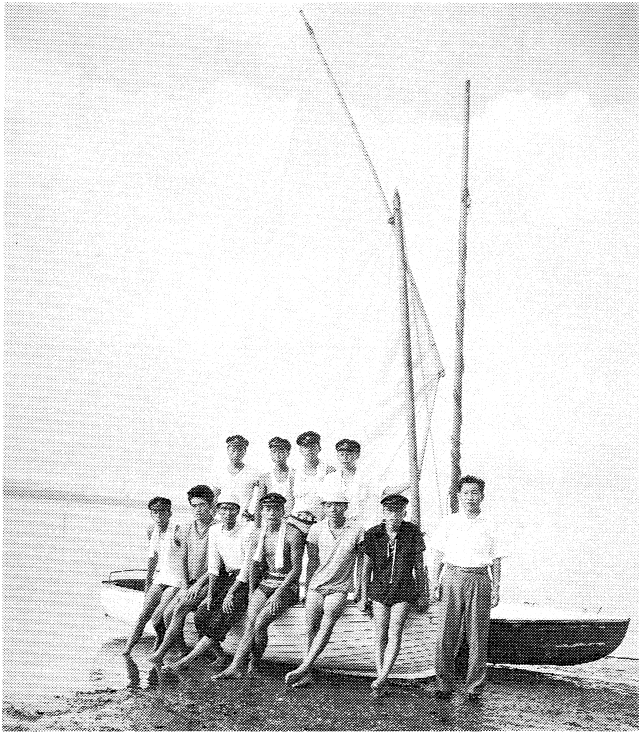
城事（スナイプ）、光安（スナイプ）、伊藤・石川（ディンギー）と小生（スナイプ）の7名でした。

名島は遠浅の為、干潮時に帰って来るのが大変、センターを又、ラダーを上げながらの四苦八苦、又そのヘドロの中に逆さに落ちて半身埋まった事もありました。

合宿は海の家で、数え歌や、バナナのたたき売りを、もちろんヨットの練習もしましたが、特に渡辺先輩がウクレレでハワイヤンを歌ってくれたのが、今でも耳に残っています。戦績は万年三位で、いいとこ無し！高田先輩の「おまえ達やーなんしょうとやー」が今でも耳に聞えそうです。

一番残念な事は三年時の十一月三日の事故の事、当日は台風一過でまだ風が強い為、多々良川口で練習をしていました。当時のスナイプはマストがインデッキとオンデッキとありましたが、旧式の為、インデッキでした。練習中マストのサイドステーのシャックルが、はずれ風下側の為、マストは倒れませんが、タックする事が出来ません。何度か新しいシャックルを、つかかえをしようと思いましたがうまくいかず、舟は沖側に押し出され横波を食って転覆、流され出しました。

末永君黒住君の三名で、歌を歌いながら、舟の回転に負けじと、舟底にしがみついています。海上保安庁の救難艇が横付けした時と同時位に末永君は沈み、



飛び込んだ保安庁の足に当りすぐ、引き上げられましたが人工呼吸の効果もなく、誠に残念にも二度と帰らぬ人となってしまいました。大変無念でも有り又、多くの人々に多大なる、労苦を嫁せました事を、おわび申し上げます。

昭和
34
～
43
年度

第 二 期

- バケツでアカくみ、重たいデインギー。(12回 村瀬)。
- 負けムードいっぱい、しかし先輩がいっぱい来て楽しかった。(13回 安河内)。
- 楽しいバンカラムード。(15回 坂口)。
- 部員は多かったが、艇が少なかった。練習はきつくても、楽しかった。(16回 内屋)。
- 自分達で造った艇庫を愛しとった。どげしようもない悪そうが1～2名おった。(19回 実測)。

福高ヨット部沿革 (第Ⅱ期)

年度	記 事	顧 問	監督・ コーチ	主 将	部員数	艇	艇 庫
34		青柳先生	監督 8回 渡辺	10回 木村 (本昭)	3年 3人 2 3 1 4 計 10	S級 1 A級 1	名島 (九大艇庫横)
35	・名島海の家で合宿			11回 栗原	3年 3人 2 4 1 6 計 13	S級 1 A級 1	↓ 名島 (艦装品は近くの13回木藤宅のガレージ)
36	◎S級「00」進水(前田造船所) ・3年生全員退部			12回	3年 4人 2 6 1 3 計 13	S級 1 A級 1 (新「701」)	
37	・名島海の家で合宿、食中毒事件 (部費 7万円)	山田先生		13回 安河内	3年 7人 2 3 1 5 計 15	S級 1 A級 1 ペンギン 1	
38	◎国体初出場(スナイブ級～ 山口県光市) ・百道(ピオネ荘)で合宿			14回 助広 (上野)	3年 3人 2 5 1 7 計 15	S級 1 A級 1 ペンギン 1	
39	◎A級「502」進水(岡崎造船所) ◎S級「703」進水(") ・S級国体出場 A級インターハイ出場(13位)	岩石先生		15回 波多江	3年 3人 2 7 1 5 計 15	S級 2 A級 2 (新「703」)	↓ 名島潮湯
40	・志賀島朝日屋裏の幼稚園で合宿 ・S級インターハイ(鹿児島)出場			16回 藤本	3年 8人 2 5 1 9 計 21	S級 2 A級 2 ペンギン 1 ※大学などから借り、 5～6艇で練習	↓ 名島(スロープ にバラック)
41	◎A級「505」進水(奥村造船所) ・S級、フィン級国体出場(大分)			17回 坂本	3年 5人 2 9 1 8 計 22	S級 2 A級 3 ペンギン 1	↓ 香椎片男佐浜 (松の木を柱としたバラック)
42	◎香椎片男佐にプレハブ艇庫完成 (西鉄所有地) ・S級インターハイ出場(滋賀) ◎S級「ぼんくらI世」進水 (奥村造船所) ◎OB会発足			18回 石橋	3年 9人 2 8 1 4 計 21	S級 3 A級 2 (新「ぼんくらI」) ペンギン 1	↓ 香椎片男佐浜 (プレハブ艇庫)
43	・志賀島幼稚園で合宿 ・フーテン鍋がはやる ・A級、FJ級インターハイ出場 ・フィン級国体出場 (部費 12万円)	桑野先生	監督 8回 渡辺 (コーチ) 清水 石橋 安松 木下 平野	19回 高須	3年 8人 2 5 1 8 計 21	S級 3 A級 2 502, 505 (修理艇 501?) インハイ出場時 FJ貸与 ペンギン 1	↓

名島城下の海岸にて

四代顧問 山田 利幸

明年度からヨット部の顧問を引き受けて呉れないかとの急な話、私は水に浮ばないし、技術的な事全く知らないので無理と返事するも、水泳の事や技術のことは先輩が来て指導するので心配ないし、顧問がいなくなると部活動が出来なくなるなど、いろいろといわれ年令も若かったし、当時、貝塚団地に住んでいたので仕方なく引き受けた。当時の艇庫は名島の海岸近くの生徒の家の車庫を利用してもらっていたので、私がこの地に一番近かった。当時、名島は海水浴場で海の家も残っていた。一番記憶に残っているのは、旧三号線の名島の入口のところに「国立公園 名島海岸入口」と書いてあったこと、名島の練習に近くても大変なことになった。春季から夏季にかけて土、日なし、特に夏季の長期合宿時には地理の補習と重なって時間が幾らあっても足りない。

夜の食事は自炊か、海の家で食事つき(名島の潮湯)の時軽い食中毒が起りあわてた。名島海岸の沖で日曜日(合宿中)のこと、悪いことは重なるもの、昼近く急に天気が急変して突風吹き、海があれ、練習してい

た艇はばらばらになり、私の乗っていた艇は名島に帰れず香椎花園近くの海岸に流された。他の艇の事が心配で技術をもたない顧問の悲哀を感じた。私が顧問を引き受けた当時の艇の主流は、第三回国体(福岡)の時使用した艇を払下げてもらったものと、九大のヨットの艇庫が名島にあったので、九大のヨット部が使用していない艇を長期無料借り受けた艇であって、新艇が先輩諸氏の努力でスナイプ級が一艇入った。今と比較すると何もかも不足していた時代である。この九大から借用していた艇が事故で流されて、九大事務局からはやかましく言われ、海上保安庁では油をしぼられた。ヨット部には事故はつきものといっても、このような事務上処理出来る事故はよいが、海の上での活動はいのちにかかわることもあるので、顧問を引き受けたときから、これだけは常に頭から離れない。真面目にこつこつと練習することが大切という事は教えられても、これがヨットの技術とどう結びつくかと考えずる必要がある。そのためにはヨット部の歴史に残るような事をした。これには何があるかというと、歴史の若いヨット部の一頁に全国大会出場を加えること、全国インターハイ、国体と機会は二度ある。九州地区で全国インターハイの予選は福岡県三校・鹿児島県一校の四校での戦い、チャンスは大いにあるし、一度で

も全国大会に出場すれば伝統が出来る。この機会に割合早く来た。山口県での国体出場をかけたの試合で、二年生がスナイプ級で勝ち福岡県の国体選手としての資格をえた。判定はまことに、きわどかったと記憶している。私の条件はととのった。

今は思い出、毎年十一月の始め名島の海岸から学校の第二体育館のところまで艇を運んで来る。満潮時を利用して石堂川を逆上って学校近くまで来て全員で運び上げる。今は学校の周辺が一変して、やろうとしても不可能である。名島海岸を練習海上に利用しているとき、私の担任していた生徒（一年生）がヨット部でもあり、この生徒の書いた文章のなかに、名島で練習のとき、仰向けになって艇に体を埋めたとき、夜空一ぱいに星がまたたき、月が大きく見えて、その間に亡き母の顔が浮びますという意味の事が書いてあった。この生徒のためにもっとヨット部を大きくたくましくものにすることも仕事のひとつと思った。

生命誕生のふるさと海で出来た上下、水平の人間関係を強い連帯感として、今後ともますます発展される事をヨット部にささげて、多々良川河口にたどりついた水の旅の終りとします。

ディングーがあった時代

五代顧問 岩 石 泰 忠

昭和24年の第3回国体の年にスナイプ1艇の払い下げにより福高ヨット部が創設されて、今年で40周年となった。

昭和24年4月は、私は併置中学3年を終り、福高1年生になったばかりで男女共学の最初の年でもあった。私は化学部に籍を置き、顧問は九大理学部化学科を卒業されたばかりの志賀史光先生（ヨット部初代顧問）で、石堂川の河口から上流まで川水の成分分析をしており、河口の採水の時にヨット部のスナイプを何度か利用させてもらった。

当時は志賀・安東（数学）、花谷（社会）先生は大学を卒業したばかりで我々生徒の兄貴分として親身な指導をいただいた。

昭和39年4月に若松高校から母校の教師として30才で着任し、小川一先生から泳げると言う事だけでヨット部顧問にさせられ、ヨット部15回波多江慎吉、16回藤本秀人、17回坂本大司の3人のキャプテンを中心に3年間顧問をさせてもらった。

船底からアカが噴水のように吹き上がる貴重な古艇

(スナイプ1、ディングー1)で絶望的艇不足。いつも立ち退きを命ぜられ転々とした艇庫の場所(名島海水浴場↓名島潮湯↓香椎花園)の問題など頭の痛い事が多かった。練習時には九大の艇を借りるなど九大ヨット部には大変お世話になった。この間私は学校に強引にスナイプ、ディングー各1艇を造らせたり、OBからボンクラを寄贈していただいたりしたが、生徒諸君の練習意欲は旺盛で、部員として非常に人間的絆の強さがあり、土・日・祭日と私自身も休みは殆んどなかった。

昭和38年夏に初めて全国大会に出場し、それから39、40、41年と3年間全国大会や国体に県代表として毎年出場できるようになったのは当時まだ独身で全国大会優勝を合い言葉に指導いただいた渡辺氏(第8回)を始め、吉積氏(第5回)、高田氏(第4回)、島本氏(第13回)など多くのOBの方々の献身的な協力のたまものであり、福高ヨット部OB会を創設しOBの力を結集していただいた平畑会長(第1回)のご尽力によるものです。

その後、全国大会優勝を始め、数々の実績を積み上げていったが、生徒諸君の努力はもちろん、OBや家族の方々の絶大なるご理解のたまものであると深く感謝いたします。

私は昭和39年4月から昭和63年3月まで約22年教師

として福高の歴史と福高ヨット部の歴史をみて来ました。我々の青春の一時期に共通の体験をした立派な宝物を心の支えとして強く生きて行きたいと思う。現役の生徒諸君が、そして福高ヨット部がこの40周年を契機として、大きくたくましく飛躍することを心から祈ります。

合宿の思い出

十三回 安河内 千 洋

合宿の最終日であった。

やけに日指しが強く感じられ、体がだるかった。丸大から借りていた二杯のオンボロディングーのコットンセールが、バサバサと重苦しく波に揺れていた。アカに濡れる足も、気持ち悪かった。

「小野体がだるないやー」

練習中は殆どしゃべらない小野は、一層無口だった。スナイプ級の主将城石が近づいてきた。2ミリ刈りの坊主頭に、ニキビがいっぱいそのままに、海坊主の風格で、仲々男らしい奴だった。足を海につけて寒けがするなら熱がある証拠だからつけてみると彼がいうのでその通りにしたら、背筋にゾクっときた。

渡辺先輩の一声で、練習は中止になった。

陸に上るとどいつもこいつも変な顔をしていた。腹もぐるぐるといいだして、小野は青黒い顔をして便所にしゃがみっぱなしだった。きっとこれは、食中毒だと誰ともなしに言い出して、そうと決った。

兎に角病院へ行こうと衆議一致。そこへ駆けつけた帆柱亭のお上さんは、只、オロオロしながら、「もういやいや」と繰り返すばかり。

顧問の山田利之先生が、

「大丈夫か、おいつ、大丈夫か」と目をギョロつかせて、皆を励ましておられた。

一体、何を食べて食中毒になったのか未だに解らない。先輩の渡辺さんは、すこぶる元気だった。城石もそれ程でなく、助ポンは食べる以外は、いつもボーッととしていて判断不可能。末藤は、タガメの二日酔のような顔をして、相当具合が悪いようだった。

九大を卒業して建築家の道を歩み始めたばかりで他界した伊藤は、いつものようにポーカーフェイスだった。

これは、大学の時の話のだが、ある先輩と伊藤と私の三人で合宿中の風呂に入っていた時のことだ。あれこれと馬鹿話するうちに先輩が、伊藤のもちものはもの凄くでかくて馬みたいだと言った。私は、是非みたくないので、



「おい、見せろ」といったが、笑うだけでみせてくれなかった。仕方なく、じっとチャンスを待っていたが、彼が風呂から上るときに背後からチラッとみえたのが、真に偉大な彼のそれに違いなかった。

占部 安河内
村瀬 伊藤
佐竹 城名
松井 青柳先生
黒住 小森
栗原 中原

伊藤は、色が白くもち肌だった。

話しは元に戻るが、幸いに名島には、池田医院があった。この医院は、後輩の池田君の御父上の医院であった。が、当時は知る由もなし。

「おい、ヤブじゃなかとや」

「篠栗の医者よりよかくさ」

「保険証ば持っとらんぜ」等々。

みんなで勝手なことを言いながら、ゾロゾロと山田先生に引率されていった。

城石が、若い看護婦に脈をとられて、「ニタツ」と笑ったが、一番元気なやつが、最初に脈を診て貰うのも主将の役得だった。

病院から帰るとすぐに解散したが、散々な合宿であった。そしてもう一つ思い出すことがあった。

この頃の合宿は、多くの先輩達が差し入れをもってよく遊びに来てくれた。

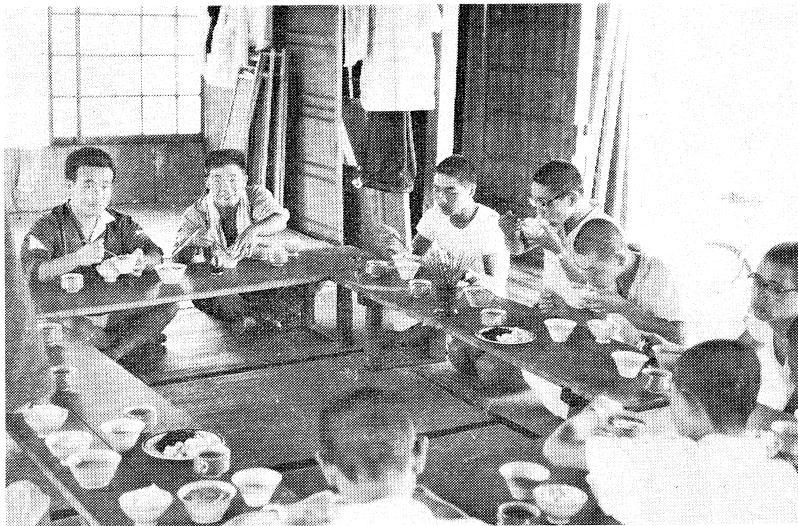
食中毒の前々日の夜であった。練習に疲れ切って裸であお向けになってぐっすりと眠っていたが、「ガサガサ」「ヒソヒソ」と先輩達が夜遊びから帰ってきた物音に眼が覚めた。

しかし、眼はあけなかった。あけると二度と眠れない気がしたからだ。

すると突然、「シュッ」と音がして、裏まぶたが明るくなった。マッチをすったなと思った途端、私の胸

のど真中に燃えかすが落ちていた。私は、「あつうー」と声を出したのだが、先輩は誰も声をかけてくれなかった。私はヒリヒリする胸を我慢して眠るしかなかった。

それから30年近く、その傷はもう見当たらない。



昭37.7 汐湯合宿 左から8回渡辺、9回栗田

全国制覇への第一歩

十五回 波多江 慎 吉

我々のヨット部在籍は、昭和37年から昭和40年の3年間でした。この時代は、まだ旧き良き時代の名残を残している時代でもあります。また、東京オリンピックが開催され、日本が高度成長へと突入して、大きく変わろうとする時代でもあります。

練習時の恰好も、スマートになってきました。それまでは、親父の古背広を着て、ロープの切れ端で縛っていた（という故高田先輩の話）のが、ジャケットを着るという具合にです。また、普通の腕時計にビニールを巻き付けて防水にしていたのが、防水時計を持つようになりました。

そんな中で、我々は、ヨット部の歴史の中でも、エポックとなる年代となったのです。積年の目標であった全国大会出場を最初に勝ち取ったのです。残念ながら、初出場、初全国優勝とまでは行きませんでした。全国制覇の第1歩である、出場を果たしたのです。

当時、学校では、ヨット部は万年3位と陰口をたたかれていました。博多湾でヨット部を持っている学校は、我が福高と修猷館と西南だけでした。たった3校

なのに、惜しいところまで行っても、それまで1位になり全国大会に進出したことがありませんでした。

最初は、我々が2年生の夏の国体予選でした。我々の1年先輩の部員数が少なく、2年生・1年生組で出場しました。詳しい戦況は覚えていませんが、スナイプ級で桐島・清水組が1位になり、国体出場権を獲得したのでです。

なにしろ初めての事なので、先輩も周囲もしばらくはフィーバーでした。資金集めとして、納涼船を貸し切って博多湾クルージングを行いました。券を売ってまわり、当日は海上とはいえ、真夏の夜、学生服を着込んで、汗まみれになりながら、生ビールを運んで回りました。しかし、その収支は結局トントンで、骨折り損だったようです。

国体出場を果たした後は、渡辺先輩の練習指導にも熱がはいりました。船は、スナイプでは、後にぼんくら1世と名付けた新艇と、十人で運んでもまだ重い九大の払下げ艇、上マークまで走ると脛までアカもれする艇の三杯でした。A級ディングーは、強風になると、マストとバウはヒールしているのに、スターンは完全におきている艇2杯でした。そして、本船にはペンギンを使っていました。本番のレースに使う艇は、九大に借りに行っていました。借りに行つて、泣かされて帰ってきたこともありました。こんな艇での練習・試

合でしたが、翌年には、国体予選は落としたものの、A級ディンギーで坂口組がインターハイの出場権を獲得しました。こうしてヨット部の第一期黄金期に第一歩を踏み出したのです。

あの頃僕も若かった

十六回 内 屋 雅 行

早いもので高校を卒業して二四年になります。福高ヨット部三年間の短い期間ではありませんが、その後の私の人生に、大きな影響を与えてくれたと思っています。

一年生で入部した頃は、十数名いた同期の部員も、卒業時には七名。しかし現在に至る迄、当時の青春時代の気持で、付き合いをしています。この原稿の依頼があった直後に、若いOBから四十周年の為に、アンケート調査に答えてほしいとの事で、いくつかの質問に答えていくうちに、今迄消えかかっていた当時の記憶が、走馬灯のように思い出され、一人懐かしさをかみしめました。

名島——とても艇庫と呼べる代物ではなく、物置きと言った方が正しいかも知れませんが、ただ福高ヨット部のふるさとです。干潮時には艇の出し入れに一苦労、近くの海苔養殖の網に、ラダーやセンターボードをひっかけたり……

志賀島での合宿 今でこそ電気釜ですが誰が調達したのか、釜底がポロポロで、飯を炊くと鉄粉が混じった飯を食わされ……、名島から廻航途中、西戸崎付近で沈同様に、ヨットの中に水浸し、おかげでカバンや学生服はびしょ濡れ……、国民宿舎の女湯の覗きを見つかり、あわてて合宿所に逃げ帰ったり……、あさひ屋さんも忘れる事は出来ません。二十数年間お世話になりっぱなしです。生徒と共に合宿所で寝起きさ話、朝一番の船で毎日授業へ行っておられた岩石先生、ごくろうさまでございました。

四十年目を迎える事が出来るのは、平畑会長はじめ、諸先輩方……、特に吉積大先輩、鬼の監督といわれた渡辺先輩、事務局の皆さんの力に負うところが大きいと思います。

福高ヨット部の素晴らしい仲間達の中にいる自分は、どんなに幸せだろうと思います。

これからも五十周年、六十周年、……が迎えられよう頑張ります。

福高ヨット部永遠なれ。

まぼろしの遭難騒ぎ

十八回 池田 整昭

真夏の太陽が照りつける八月某日、同期生八名（本来九名であったが、一名は都合により参加できなかった）のように記憶している）は、送別クルージングと称し、二泊三日の予定で、相島をめざして出発した。A級ディングー、Y15（船外機付き）スナイプの3バイに分乗し、昼過ぎ頃香椎の浜を出発した。最初、順風であった風も、志賀島に着く頃には、微風となったため志賀島の橋の下で一泊し、翌早朝志賀島を出発、相島をめざした。

空は澄みきって青く、センターボードの隙間から見える水の色は、空の青よりもさらに濃い青で、その中を泳ぐコバルトブルーの小魚（おそらくコバルトスズメである）の美しさに目を奪われた。日頃博多湾の濁った水とボラしかみていない我々には、感動的な光景であった。

風は微風で、思うように艇は走らなかったが、それでも正午前には、相島に到着した。

しかし、着艇場所を求めて、東側に出たところで激しい潮流に出会い風はあるが、ほとんど進まないとい

う状態となった。そのうちY15が流れ始めみるみるうちに島から遠ざかり始めた。その時、3バイの不振なヨットを監視し続けていたと思われる海上保安庁の巡視艇が近づいてきて、何やらマイクで呼びかけているのが見えた。幸いY15には船外機が取り付けてあったので、事なきを得たが、後で聞いてみると、あまり離れるなみたいな事を言われたそうだ。クルージング中は、出艇の時と着艇の時には必ず、海上保安庁に連絡をしていたので、様子をみんできたものと思われた。結局、島を一周するかたちで、島の西側の海岸に着艇したが、この海岸は砂地でなく、川の中流にみられるような丸い拳大の石がゴロゴロころころがっている海岸で、ヨットをつけるには不適當と思われたが、他に適當な場所もなく、ここで一泊することにした。

船を丘にあげ終わった頃には、すでに、日没近くなっていたので、夕食の準備を始めた。槓を集める者、米をとぐ者、おかずにする海の幸を採りにいく者、それぞれ手分けして食事の用意をした。夕食が終わった頃には、あたりは真暗になっていた。浜辺に横たわり、夜空を見上げると今まで見たこともないような星空が広がっていた。まるで星空の中を漂っているような錯覚にとらわれた。

翌日7:00頃には相島を出発し、帰路についた。正午前には志賀島に着き、さらに香椎へと向かった。午後3:00

頃には無事着艇し、艀装を解き終えた後、無事に終わったという安堵感と楽しかった思い出を胸に各自、自宅へと散った。家に帰り、青い海や夜空の星を思い出しながら横になっていたところ、突然学校から電話があり「第七管区海上保安部より、本日相島を出発したヨットがまだ着いておらず、行方不明になっているので、搜索態勢を整えたのでこれより搜索を開始する旨連絡があったが、いったい何事か。」という内容であった。

これを聞いて腰を抜かさんばかりに驚き、おおあわてで各所に連絡をとり、全員無事に帰ってきてきている旨を報告した。結局遭難騒ぎは、まぼろしに終わったが翌日私は学校に呼びだされた。当時顧問であった岩石先生の部屋に入るやいなや、先生は烈火の如く怒り、「何の相談もなく、勝手にヨットを持ち出しクルージングをするとは何事か。」と激しく叱責された。又部長の石橋君以下数名の者は千鳥饅頭片手に、海上保安部にあやまりに、行くことにあいなった。

これがヨット部生活のしめくりとなったが、今考えてみれば、ディンギーやスナイプのような小型艇でよくぞ外海にのり出したものだと思う。

しかし、この送別クルージングのことは、今でも鮮明に記憶しており、その時の叱かられた岩石先生の怒りに満ちた顔とどなり声は忘れ得ない思い出となっている。

いる。

現役時代の思い出

十九回 高須修平

- 名島の凸凹だらけのスロープ
- オッチョイ泣かせの「県庁」艇
- 母なる「ゼロゼロ」
- 初恋の「703」新艇
- 親愛なる「ペンギン」
- 今でも夢見る「赤本船」
- 毎回のガチョン・ピンのトラブル



片男佐の艇庫にて 左から岩瀬、栗田、真名子、高須、北本、篤、鳥飼

・神を越えた存在だった「渡辺監督」 ・塩っ気あふれる「岩石先生」 ・ひとり残って黙々整備の「荒木先輩」 ・塩がふいて白くなった「篤のアズキ色のヤッケ」 ・セクシーだった「A級ディンギー新艇502」 ・傷が絶えなかった足の裏 ・寒さに震える9月入部の「鳥飼と篤」 ・石油缶を叩きあいながらの夜間回航 ・潮風に髪を乱した「桑野先生」 ・『甘かろうぜ』が口癖の「藤田先輩」 ・加山雄三を口ずさむ「安松先輩」 ・ファントマの鉄の意志「石橋先輩」 ・702（マルニ）が似合った「副島先輩」 ・『船はく出てい



片男佐海岸 昭43年 ぼんくらI世をオッチョイ

くよ♪ ケムリくはのーこるーよ♪♪ ・名島から約束の地「片男佐」へイザ出発 ・酒癖のイイ「岩瀬、真鍋、伊藤」 ・二日酔の期末試験（もう時効） ・ポリネシア人の巣窟「部屋」 ・名島のダンディズム「実淵」 ・いろいろあった色男「森本」（これも時効） ・付き合いの良かった「北本先輩」 ・建築と土木の実習みたいだった3年間（艇庫建築実績3棟） ・ペンギンが似合う「平野先輩」 ・喧嘩早い「岩瀬」 ・オチコムショウジの「栗田」 ・片男佐のボート屋のオッチャンとオバチャン ・〇〇の野グソ（コレハ匿名） ・すぐに切れるナイロンロープ ・どうしても名前が出てこない潟洲町の「〇〇 工所」 ・すぐく大人に見えた3年生「坂本先輩 宇和先輩、牧先輩、水元先輩」 ・『コンチハッ！』の「真名子」 ・『ヨーオッ！』の「百田」 ・『センパイッ！』の「壇」 ・黙々実行の「大隈」 ・『ソウデスカア』の「竹園」 ・ボンクラを地で行く俺たち先輩の下でよくがんばった『伊藤、藤木、斉田、姫野、湯川、真鍋』

平々、夕日の能古ノ島を背にしてY-15の上で飲んだ酒の旨かったこと！

永遠の福高ヨット部に乾杯！

昭和
44
～
53
年
度

第 三 期

- 理論派もおれば、根情派もおった。(21回 齊田)。
- 同じ苦勞をした仲間、まとまりがよかった。(22回 田代)。
- 一時は全部で3名、部員を増やすのに苦勞した。(26回 島田)。
- 久しぶりに人数が多く、活気に満ちていた。(28回 渡辺)。

福高ヨット部沿革 (第Ⅲ期)

年度	記 事	顧問	監督・ コーチ	主 将	部員数	艇	艇 庫
44	<ul style="list-style-type: none"> 春のほとんど全チン事件 芸工大、九産大と共に練習の期間あり。 ◎S級「ぼんくら2世」進水式 (奥村造船所) ◎「かざいと」創刊 	桑野先生	監督 渡辺 (コーチ) 8回 18回 石橋 安松 〃 木下	20回 百 田	3年 5人 2 6 1 8 計 19	S級 3 (ぼんくらI 703 701 白フィン) A級 3 (505 502 314)	香 椎
45	<ul style="list-style-type: none"> ◎S級 インターハイ 優勝 A級、FJ級 〃 8位 ◎S級 国体 2位 ・S級「ぼんくら3世」 田辺氏より寄贈 	野上先生	監督 磯野氏 (福大OB)	21回 伊 藤	3年 6人 2 6 1 10 計 22	S級 4 (ぼんくらI 505 502 703) A級 2 FJ級 1	↓
46	<ul style="list-style-type: none"> ◎S級 インターハイ 3位 FJ級 〃 9位 ◎S級 国体 優勝 		監督 加賀田氏 (西南大OB) (コーチ) 20回 真名子	22回 久 保 山	3年 6人 2 4 1 5 計 15	S級 4 A級 2 FJ級 2 フィン級 2	伊 崎
47	<ul style="list-style-type: none"> ◎百道へ移る。西南艇庫横に船台設置。 ・S級 国体出場 7位 フィン級 〃 28位 		(コーチ) 18回 石橋	23回 豊 原	3年 4人 2 4 1 1 計 9	S級 3 FJ級 2 フィン級 2	百 道
48	<ul style="list-style-type: none"> ◎西南艇庫火災のため、ぼんくら「世・」世をはじめ、全艇を焼失。 ◎S級 国体出場 3位 ◎1月 8日 13回 伊藤完治氏逝去 ◎3月 29日 4回 高田政昭氏逝去 ◎4月 29日 20回 壇 雅貴氏逝去 	永島先生	(コーチ) 20回 竹園	24回 西 (泉)	3年 5人 2 2 1 5 計 12	全艇焼失 ・県連より艇貸与 S級 FJ級 3	↓
49	<ul style="list-style-type: none"> ◎大岳艇庫建設。 ・S級 インターハイ出場 17位 FJ級 〃 〃 6位 (福岡：小戸) ・九大艇庫で合宿 (部費 12万円) 		(コーチ) 20回 竹園 21回 真鍋	25回 宮 下	3年 2人 2 2 1 3 計 7	S級 5 FJ級 5	大 岳
50	◎4月4日 1回 堀田 剛氏逝去		(コーチ) 21回 真鍋	26回 山 本	3年 2人 2 3 1 3 計 8	S級 5 FJ級 5	↓
51	・S級 インターハイ出場 22位		コーチ 21回 真鍋	27回 中 尾	3年 3人 2 4 1 10 計 17	S級 5 FJ級 5	↓
52	<ul style="list-style-type: none"> ◎名島艇庫・合宿所落成 ・S級 国体出場 28位 (部費 20万円) 		コーチ 19回 栗田	28回 赤 坂	3年 4人 2 8 1 6 計 18	S級 5 FJ級 5	名 島
53	<ul style="list-style-type: none"> ◎FJ級「277」進水 (小野寺ボート製作所) ・FJ級 インターハイ出場 10位 ・S級 国体出場 18位 	和田先生 永島 〃	コーチ 20回 真名子	29回 佐 々 木	3年 8人 2 6 1 7 計 21	S級 5 FJ級 6 (新277)	↓

懐かしの福高ヨット部

七代顧問 野 上 一 男

私が福高に赴任したのは昭和四十四年。翌年の四月花谷教頭から、ヨット部顧問を任命された。理由は、おまえは新任であり、通勤が香椎を通って来ている（その頃、艇庫は、香椎花園の横の浜にあった）、しかしヨットについては何も知らない、という事であった。かくして、新任の中年男は、何も分らないまま、福高ヨット部の顧問に任命されたのである。

しかし幸運な事に、この昭和四十五年は、インターハイ優勝という輝やかしい年であった。スナイプ級県代表として、愛知県の蒲郡ヨットハーバーのインターハイに出場。伊藤、姫野の艇が、台風の吹き荒れる中で、総合優勝を勝ち取るという、誠に輝やかしい福高ヨット部の金字塔を飾ったのである。

特別列車で博多駅に降り立った海の勇者達は、駅のプラットホームでの歓迎式を受け、つづいて、ブラスを先頭に学校までの凱旋パレード。道行く人々の拍手をあげながら、学校での祝賀会に臨んだのであった。

そして、その年の夏の夏の国体にも、スナイプの県代表として、姫野、伊藤は、北は東北の岩手県の宮古湾に

連続制覇を期して、乗りこんだのである。

私達監督は、観覧船に乗って上マークの近くにいた。おりしも高校生のスナイプ級のスタートを告げる号砲が鳴り響く。しばらくすると、各県代表の艇が、雲霞のように群がり競い合いながら、上マーク目指して、私達の観覧船の前を通りすぎて行く。一番艇に双眼鏡をあてる。違う。二番艇を見る。これにも姫野の姿はない。次々と通り過ぎて行く。やがて大集団も通り過ぎてしまい、後には取り残された艇が、ポツン、ポツンと来るだけになり、しかもそれも通り過ぎてしまった。と、遙か後方より一艇が来る。双眼鏡で彼方の艇を見ると、なんと我等の姫野、田代の顔が見えるではないか。私は彼等の生存を神に感謝しながらも、あまりの意外さに、ただ椅子に倒れこむだけであった。

しかし、この観覧船の椅子に倒れこんだ哀れな中年教師を踏みつけるかのように、限りなく、正に限りなく遅れていた吾等が福高ヨット部の姫野、田代組は、その時燃えに燃えていたのである。レースの後半、彼等は風がピタリと止んだのを利して、なんと6着でゴールしたのであった。まさに、私にとつて、姫野のセーリングは神業の様に思えたのであった。後での話によると、好スタートをきったものの、フライングの揭示。スタートをやりなす。しかしフライングの揭示はおりない。今に降りるか、今に降りるかと思ながら

走っていたが、ついに降りず、泣く泣く再びスタートラインまで引き返したという事であった。レース後、県の監督の秋山氏より抗議に対し、本部は、「不幸な出来事でした。」の一言で終りであった。

そして、その時の最終レース。最後の下マークをまわる時、姫野の艇はすぐ前の一番艇、二番艇を切れ味鋭く抜いて一番に飛び出して水をあげはじめた。すぐ前を走っていた京都の艇を抜いたのである。京都の艇を抜けば、姫野組の優勝である。これで、福岡県代表福高チーム、姫野・田代組の優勝決定である。私は確信して、観覧船の椅子に腰をしろしたその時であった。「あ、誰か、海に落ちたぞ。」双眼鏡に写し出されたのは、宮古湾で泳ぐ田代の姿であった。

セールのはためく福高艇の横を、京都の艇はスルスルと追い抜いて行った。

かくして、インターハイと国体二つのタイトルを獲得という大偉業は、一瞬のうちに諦めきれない夢と化したのであった。

しかし、翌年、宮古湾で泳いだ田代は、和歌山国体で、前年の無念を見事にはらして、国体でのスナイプ級優勝を勝ちとったのであった。

入部当時の思い出

二十回 竹園良雄

弁当を食べる時、それを包んである新聞を読むのが習慣となっているが、先日こんな記事が出ていた。ドロに座礁、必死のボート客一九人、泥水にまみれ苦闘四時間。アベックの顔は、はっきりわからなかったが、それらしきボート四隻が孤立している写真が載っていた。おもしろいなあと読んでみると、なんと現役当時の練習海面であった片男佐の海岸であった。現在埋立てがかなり進んでいてトラックがよく通るがいい気持はしない。名島（汐見）の岸壁から見ると夕暮などは絶景というか、なんとなく趣があった。立花山がぼんやりと黒ずんできて艇庫がポツンと白く残っている、そんな感じだった。艇庫もお月さんと同じで、遠くから見るとなかなかいいなと思ったこともあった。ちょっと傾いて見えるが、現役を退ぞいて、風が強かった日曜日等は、夕方岸壁に行くと練習が終って風を逃がし乍ら帰っているヨットを見ると、ホット一息ついているように感じられ、私達の現役時代をなつかしく思い出される。

その中でも一年の時が思い出深い。入部第一日目、

本船を沖までこいでいった時、先輩からスナイプとかディングーとか教えてもらったが、最初に覚えたのがペンギンだと思う。腹がつるつるしていてなるほどと思った。その時はまだボンクラ一世もできていなかった。それでニュー艇（七〇三）が一番新しかったが、本船の横をしぶきをあげて通っていくのを見て、かっこいいなあと思った。フィンの快走ぶりを見てそれにもあこがれたものだった。六月になってボンクラ一世がきたが進水式のことをよく覚えている。前日暗くなるまで何度かリハーサルをやったが、あいにく当日は天気が悪く海も荒れていたが、たくさんの先輩がこられてにぎやかだった。私はかき氷の係だったが、なにしろ手動式の古いもので、回転が悪く、ほこりもついていたのでよくふいて、ついでにグリースまで塗ったら油くさいかき氷ができた。それでもなかなかの評判だった。

「ボンクラ一世」はニュー艇（七〇三）などと比べてもいかにも現代的な、走りそうな船だった。艇庫が、ぼろぼろだなあと再確認したのもこの時だった。（現在よりもう一つ古い艇庫のこと）福高ヨット部の歴史の中でも、ボンクラの誕生は古いものと新しいものとの接点で特筆するに値するものであったと思う。こうして七月に入り、囲りにも慣れてきたころにやってきたのが合宿であった。

連日よく吹いた。そのころディングー屋であったが、何といっても修理艇（その名の通り、アンカリングしておくと沈るのは時間の問題であるほどのものだが、先輩の中には、腹を立てられる方がおられると思いますが――）に乗るのが恐しかった。クローズ・ホールドの時はこぼしている、なんだかねじれているように、このまま分解してしまうんじゃないかと心配し、ランニングの時はバウのデッキの下からアカが入ってくるんだからヒヤヒヤだった。終始トップだったボンクラ一世をみて、あれに乗ってみたいなあと思ったりしたものだ。



片男佐海岸より

名島の海岸から、帰っているヨットを見ると、合宿の帰りのことや強風の帰りのことを考える。

一年の時の思い出はほかにフウテン鍋だとか、沈ぐの思い出だとか、入部してすぐ一生懸命すのこを作ったことなど、たくさんあるが苦しかった時の方がよくおぼえているようだ。片男佐の浜の近くまで埋め立てられて少し淋しい感じもするが、それだけになつかしい。現在次々と新しい船ができていくが、だんだん船に対する愛着というものが欠けてきているように思える。いくら新しい船が造られたとしても、先輩たちが乗ってきた船を修理を必要としても、それを乗りまわしてほしいと思う。現役の時よく先輩から「いい船ばかり乗ってもうまくならんぞ」といわれたが、その通りだと思う。それから今述べたことにも関係があるかも知れないが、現役当時にふりかえって反省させられ、後輩の諸君に言いたいことだが、もう少し個性というものを出すべきじゃないかということ。

けっして人よりもすぐれているとか、そういうものじゃなくてよい。先輩がよく口に出される「潮気」というもの的一部かも知れない。とにかく現役時代はしっかり頑張ってよい思い出をたくさん残してもらいたい。

(「かざいと3号」より転載)



香椎沖

あの日、あの頃

二十一回 姫野芳英

本船沈。雨のマークボート。夜間帆走。あの夜光虫のきらめき。真名子さんの半沈。恐怖のジャイブ。志賀島の合宿。渡辺さんの落水。冬の海。Y15のペーパーかけ。ペンキのにおい。グライндターの音。そして国体予選の落水。夏の練習。坂口さんの半沈。ポンの沈上げ。磯野さんが歌った歌。ぼんくらⅠのペーパーかけ。ポリキンパテが乾かなくて困った。生の松原のノックアウトパンチ。矢のような15376。そしてあの日ぼんくらⅡ世が飛ぶように走った。死の特訓。雨の三校戦。雨があんなにすばらしいものだなんて。そういえば、インターハイの第2レース（予選）も雨が降ったっけ……。そしてあの日、宮古湾でも雨に濡れながら走った。雨が好きだ。後統艇は霧に隠れて見えなくなる。しんちゅうのパイプと針金。まっすぐな羽根を求めて花屋をさまよい歩いた。マストトップにそびえ立つ風見が好きだ。夢がある。希望がある。ぼんくらⅠが好きだ。彼女には94のセールとぼくの風見がよく似合う。ランニングで走っている。すると雨、後統艇は霧に包まれる。そんなあの日第2レー

スだった。バウが波を切る音が好きだ。ほほをなでる風が好きだ。ふるえるようなジブセールはいい感じ。ダントツは特に好き。太陽が輝いている。波がきらきら光っている。そんな海もトップで走っているとなぜだかとってもビューティフル。星の降る朝まっくらけのぎ装。三度目の夏。そして秋風の吹きはじめころ……。

※ 註…… 渡辺さんの落水についてですが、これは、ぼくがクルーをしていた時のことです。念のため。すから確かな情報です。

その他おもしろいこと……

斉田とポンの沈記録11回

まくらのベッド

春の雨いとをかし

後統艇の霧の中にかくれたる

マストトップはぼくの風見

ぼんくらⅠは94のセール

また バウが波を切る音

ほほをなでる風

ジブセールのふるえることも をかし

気のとほくなりぬる
 ダントツはいふべきにあらず
 夏の朝 すべて風の吹かぬは
 いとあつうてわるし
 やうやう 風の吹きいづるも
 あたますでに ぼけぬるにて
 練習どころには はたあらず
 風のうしろより吹きいで
 第一マークにウイスカをはりてゆくも
 をかし
 ポートスタート いとをかし
 スターボート艇のつらを
 にたりと笑いつつ 通過しぬる
 いとあさましきことは
 後続艇の うしろよりわめきたてる
 まいて差のますますひらきたる
 救ひがたし
 つめすぎて船の止まりたる
 いとあわれなり
 つめ角度 すぐれてときめきたれど
 あわれなるは スピード
 オーバーヒールもわるし
 スキッパーの必死でがんばりたれど
 あわれなるはクルーなり



(「かざいとる号」より転載)

福大艇庫前、河口、ぼんくらⅠ-Ⅱ 左から姫野、湯川、伊藤、真鍋

不思議な海

二十二回 市原 徹 志

昨年（'88年）4月、たまたまヨーロッパに行く機会を得、同期キャプテン、パリ在住の久保山に数年ぶりに会う。自宅の夕食に誘われたがむしろゆつくり彼とパリの風景のなかで昔話に花を咲かせたいと思い、カルチェラタンの典型的なレストランにてうまいワインを酌み交すことができた。

お互いの仕事のこと、家族のこと、住宅ローンのこと、パリの人も土地付き一戸建て志向が強いこと、フランスの税制のこと、彼の娘さんの受験勉強のこと、米国人・英国人（アングロサクソン）にくらべてフランス人のノンビリなこと、日本の国際化のこと、東京の土地高騰のこと、東京がニューヨークになること、博多が日本のサンフランシスコになること、円高のこと、日本人の特殊性のこと、：etc。

「せっかく来たんだから、少し色ばい処も見てた方がいいな」カルチェラタンから彼の車でピガール街まで約15分、基本的には無責任な旅行者であり、美味しいワインのおかげで躁情態の僕にとつて、車から見える夜のパリのなんと美しいことか。もちろん、71年夏

の終り同期田代邸で初めて聞いた「ユーミン」は流れていない。

突然、17、18年前のあの海にあの風景がフラッシュバックされていく。「実はあの時試合前に沈をして恐くなつたんや」「アイツとは気まづい時もあつたんや」「あの時、タックをしなかつたら。」「もう少し俺が頑張つてやつとけば」「あのお前達三人の国体優勝はいろんな意味ですごいことだよ」「多分、そう、それでよかつたんよ」……。

'71年（昭和46年）夏、インターハイ（高松ヨットハーバー）。FJ級第一レース。同期サブキャップ市川の艇は、第一マークにトップで近づく。「さすが」「うまく行けば優：」「よつしや、いいぞいいぞ」。しかし、誰が次の状況を想像しえたのだろうか。第一マークをトップ回航、スピルネーカーを上げたのち、沈を期するのである。「シマッタ」……。同期FJ乗り尾園も同じ思いであつたに違いない。つまり結果としてはFJ乗り三人の共同責任なのであるが、しかしそれ以上に「優勝」というソフト構築に100%努力が足らなかつた僕自身に痛烈に恥じ入つたのである。

本船から何度も、「リタイアしますか」としつこく言われるが、市川は屈せず。流れたラダーを目ざしてクルー鈴木君を泳がせる。もちろん見事に完走する。海岸からは、静かな風景だつた。彼は流される艇の上

から鈴木君を見つめながら無意識のうちに何かおおきなものに対して祈り続けていたに違いない。そして夏は終る。

僕等六人は、現役を退いた途端各々勝手に飛び散っていったという気がする。多分、ヨット生活を含めた高校時代というものに早急に自己解決する必要があるのだらう、'69-'72年の時代の動きと同じように。あれから20年弱の月日が流れようとしている。偶然か必然か、僕等は、あの不思議な大き過ぎた海と空に出会った故か、あの同等の価値を今でも探し続けているのかもしれない。

最後になりましたが、現役諸氏、事務局各位、先輩各位ほんとうに40周年おめでとうございます。と同時に、何も協力出来ないことに深くお詫び致すとともに、「かざいと」という青春のメッセージを年一回情報発信して頂いてることに深く深く感謝する次第です。現役諸氏、優勝という目的のために、合理的に完璧にすべてをシュミレーションして「心意気」で頑張ってください。

片レグコースのショートレグ

「超短篇・ジュンイチロウの青春記」

二十三回 真崎 邦彦

(その一) 青春とは 何だ? ……

マキ ジュンイチロウ…以前にも私は、この名前を登場させたことがある。その頃私も彼もまだ大学生であったが、今はもう34才。いいおじさんである。

今更何が青春なのか…それから先ずお話ししなければならぬ。しかし、話は長くなりそうである。ブツチャケた話、私も彼もまだ青春の真つ只中にあり、したがって毎日が焦燥の日々であるため、そんな暇がないのである。

したがって、我々の少年時代の本当の(?)青春物語についてお話することにより、今青春の真つ只中であると豪語する所以を談じたい。

私と彼、マキ ジュンイチロウは、とある進学高校の普通の男子生徒であった。私もジュンイチロウもどいういわげかヨット部というクラブに入ってしまった。そこで出会い、その中で火花を散らす仲であった。私は、優等生とまでは行かないまでも、まあまあ成績で入学しており、したがってヨットをやっていると成

績がなかなか上がらず、クラブ活動と学業の両立に悩まされる運命を背負わざるを得なくなっていた。一方ジュナイチロウは、あまりそういうことを気にする男ではなく、何かをやつていれば良いといった風で、何の悩みも感じさせない、一見何を考えているのかわからない男であつた。

私もジュナイチロウも毎週土曜になると、うるさい先公の説教を離れ、世間や女生徒の目を離れて、優しい海に抱かれに行く日々をおくっていた。

まだ一年生の我々にとつて、海は誇りであり、安らぎであり、優しい存在であつた。

三年生は、雲のうへの神様であり、二年生は、時々三年生の愚痴を言う程度で、練習に余念が無く、我々一年生は全く自由にヨット部員としての誇りだけを満喫していた。

しかし、ヨット部員として最初の夏が終り、神様である三年生がヨット部始まつて以来の素晴らしい成績を残して引退してからは、ヨット部の中にも、われわれ一年生の心の中にも、厳しい秋風が吹くようになってきた。その夏三年生は、インターハイ優勝という偉業を達成し、全国制覇が現実のものとなつて、われわれは常に大きなプレッシャーを背負わされることになつたのである。それまで三年生の蔭に隠れていた二年生が、鬼と化し、奴隷といわれながらもチャホヤされ

ていた我々一年生が厳しい練習の矢面に立たされることになつたのである。

最初の辛い秋の強風も経験し、冬の整備や嫌な陸トレも何とかこなし、一年生にとつては大きな試練である、毎日寒さと強風に煽られる春休み練習を迎えていた。

新艇同様に衣替えしたスナイプを水面に浮かべ、自分の整備した艇に感じる愛着感と闘志は私もジュナイチロウも同じであつた。

一年生の部員は全部で九名、二年生は六名。インターハイの県予選はスナイプとFJの二クラスで、一クラス各二艇で行なわれるため、各々四名ずつ、計八名がレギュラーとなれた。そのほかに、国体用の一人乗りフィニク拉斯があり、これらのレギュラーの座をめぐつて、一年生の間でも激しい闘志を燃やしていた。

しかし、春休み練習が始まつてからというもの、連日の強風と激しい練習に疲労が蓄積し、また、艇やセールの修理に追われ、二年生にもあたられる毎日に、ストレスが徐々に大きなしこりとなつて膨らんでいったのである。

私も疲れていた。掌は、ジブシートを引く度に豆がつぶれていき、身がむき出して潰瘍と化し、鉛筆も握れないほどである。ミノルも、シゲサンも、スギノもカッツアンもヤマウチも一年生のすべての部員が疲れ

切っていた。ジュンイチロウとて同じだったはずである。そしてついに、みんなのストレスが爆発したのである。春休みの締め括りとして行なわれるはずだった新人戦。その新人戦を数日後に控えた、ある練習の日のできごとであった。

「練習の集団ボイコット」

この日申し合わせたように、ミノル、シゲ、スギノ、カツアン、ヤマウチの五名が、補習授業の途中から私やジュンイチロウに代返を頼んで姿を消したのである。みんな、それぞれに思い詰めたうえでの行動であった。

私も、「このままでは自分がだめになる。勉強も出来ない。彼女も出来ないし、きついばかりで楽しいことは何もない。何のために、こんなクラブを続けているのだろうか」と、悩みに悩んで、ついに授業中に退部届けをしたため、この日の練習を最後にやめるつもりでいたのである。

しかし、五人に先を越されてしまった。私が暗い気持ちで艇庫に着いた時、

「おい、あさつてからの新人戦どげんするや……」溜め息とも付かぬ沈んだ声が聞こえる。五人が練習をサボって姿をくりましたことに、二年生は頭を悩ましていたのである。いつもは鬼のように見える二年生が、この時ばかりは惨めで可哀想に思えた。その姿を見て

私はついに退部届を出しそびれたのである。

そして、結局、その日姿をくりました五人はヨット部には戻らず、私とジュンイチロウとヤスとタカの四人が残った。

後でその時のことを、四人でよく話したのだが、ヤスも口を揃えて言った。「あの日、俺も知つとつたら、あいつたちと一緒にやめるっちゃった。あいつたちに、先ば越されてやめられんごとになった」と……。しかし、ジュンイチロウは違った。彼はやめることなど毛頭考えてなかつたのである。

「俺は、小学校、中学校と転校生でいじめられてきたけん、こんぐらいのことなあんもきつうなか。そりゃ体はきついばつてんくさ……。二年も本当は悪い人達じゃないつちえ、訳の分からんことでクラシたりしんしゃあわけじゃないしくさ……。俺にとつては、ヨット部、天国のごたあもんじえ。楽しかー。これも、俺の青春じゃないとかいなあて思いよう。」

彼は、全く屈託がなかつた。私は、「そんなもんかいな？」と今一つ腑に落ちない憤りを感じながらも「青春とは何だろう?……」と、自問自答しながら、ずるとヨット部生活を続けて行つたのである。

(その二)

気分はいつもトップレーサー、目指すはいつも日本一!

月日は経過し、私はあの日ヨット部をやめ損なつたお蔭で、神様の三年生へと成長して行つた。

ジュンイチロウも、生きがいを感じているヨット部生活の中で、ますますたくましさを増し、勉強では徐々に落ちこぼれていったものの、ヨット部にはなくてはならない存在になつていった。

「あいつみたいのを、『潮気の有る』というのかもしれない！」ライバルながら私は時折、羨望の視線を送つていた。

私たちは、よく練習した。海のうえでは、同じスナイプ屋のジュンイチロウと目くらを立っていがみ合つた。FJ屋のタカは勝負師で、涼しい顔をしてスナイプを抜いて行く魔力を備えていた。ヤスもまた、一人のよさそうな顔をしながらも、したたかな闘志を秘めていた。

コーチの真一先輩は、我々を前にしてよく言つたものである。

「おまえら日本一になるには、何をすればいいか分かるか。」

『日本一』恐らくヨット部に入らなければ、こんな言葉を意識することはなかつたらう。他のスポーツをやつていたら、さほど運動神経があるわけではない我々にとつては、無縁の言葉であつただらう。それを現に今、我々は目指そうとしている。それどころか、既に

先輩は現実に成し遂げて、我々は、それを守らねばならないのである。

「大学に入るためには、教科書をマスターすればよい。しかし、『日本一』になるには、何をしても足りないことはないんだ！どんなに厳しい練習をして実力をつけても、運に見放されたら日本一にはなれない。」

コーチの言葉に、我々は運をも呼び込む実力をつけるため、練習に励んだ。

然してその結果、インターハイの県予選で我々はトラブルに泣き、二クラスとも敗れ去つたのである。

ジュンイチロウも私も泣いた。ヤスもタカも虚脱感に言葉を失つた。これが時の運なのか……

その後、高校ヨット部を引退してから、私はしばらくヨットというスポーツをやる気力を失つていた。

しかし、ジュンイチロウは違つた。わざわざ浪人してまで私の入つていた大学に入学し、またヨットをやるうと言ひ出したのである。そこで私はまた、ジュンイチロウとヨットをやるはめになり、再び『日本一』という言葉に振り回されることになつたのである。

ジュンイチロウは私によく話した。

「俺は、大学に入つて初めて、レースの面白さが分かつてきた。レースのツボが見えるようになってきたよ。頭の中で展開したその場面が、びつと目の前に開けたとき、俺は生きがいの全てを感じるよ。」

「例えば、やや下有利のスタートで、上までポートのロングレグのレースとする。やや下のほうから十分にフリーウオーターを持った好スタートが切れ、下からでた集団を押える形でしばらくスターボーで走る。このとき、上の集団は俺がSLPですべて蹴落し、次々とタックして逃げていく。その後、俺は下の集団よりいち早くスパンとタックを返してやる。ここからのポートレグは腕の見せ所。自分が一番早いんだという自負がないとだめなんだ。自分より上でスタートし、逃げていった連中を完全に“高さ”で押え込み、自分よりタックの遅れた連中からどんどんバウを出して前にぬきんでる。そして、ひたすらスピードを念じつつ走る。上マーク付近のスターボーでつまるブローを確認しながら、マーク九時でスポンとタック。ググッとブローに乗れた瞬間、レース海面を見渡すと、ダントツが確定。このショートレグを走る瞬間、充実感の極致を感じるよ。」

「気分はいつもトップレーサー！ 目指すはいつも日本一！」

学生時代の彼の口癖になっていた。

そして、私も学生時代、ジュニイチロウのおかげで満足のいくヨットライフを楽しむことができた。我々は、学生ヨット界で常にトップに君臨し、全日本のタイトルを物にすることができ、母学の黄金時代を築く

ことができたのである。

その後、彼も私も社会に出て、ヨットからは随分遠ざかってしまったが、ジュニイチロウの「気分はいつもトップレーサー、目指すはいつも日本一」この言葉は、彼の人生観に生きていくようである。そして、あのショウトレグを走る充実感を得るため、私も彼も日夜青春しているのである。

この物語は、事実をモディファイしたフィクションです。

思うこと

二十四回 泉 義弘

今から18年前、海への憧れを抱いてヨット部へ入部階段下の三角のスペースを利用した薄暗い倉庫のような部屋、前には、赤ペンキに“YACHT”と白ペンキで殴り書きされたベンチに、真黒い顔のゴツイ恐そうな兄さんたちが、目だけをギョロりとさせて足を伸ばして座り、漁師の微笑で歓迎してくれたような気がする。これが、出発点だった……。

当時、艇庫もなく船の維持・管理が大変であり、いつも整備、セール縫い、見張りをしていて、海の上で

は、本船の笛吹きをよくやっていた。ロマンチスト（？）の私の気持ちとは裏腹に、雑用ばかりで、一年の後半まではヨットに乗りたくてもあまり乗せてくれなかったようである。記憶の片隅にあるのは、錆びて上げ下げできなくなつたセンターボードを保有している『703』に乗せてもらいマーク回航後、物理的に不可能なことを恨性の一言でやつたこと、動作が鈍いと後ろから罵声と共に足が飛んできたことがある。この船は、常に、他艇よりはるか後方を帆走しており、船の中での声なども他艇から後ろを振り返つて耳をそばだてて初めて確認できる代物であつた。

一年時は、大変きつかつたが、先輩たちがインターハイ・国体で活躍していたので、常に希薄と勇気があつたように思える。三年生後半からは、ミュンヘンオリンピックの代表選手たち（FIN級）や大学の方たちと合同練習させて頂いて、大変環境に恵まれていた。その結果として、千葉国体に三位入賞できたのだと思う。

また、ヨットは木造からFRPへと、マストはウッドマストからアルミマストへと、A級ディングーは470（大学のみ）へと過渡期で、大変興味深かつた。ヨットの今昔を充分味わせてもらったような気がする。

一方、部員の方は、ジプシーの時代（西南大学へ居候）でつらかつたので、二年次は六人位で寒い冬の海

へ出航していた。オッチョイも少人数でやつていたので、強風時の着岸後は、体力が限界に達していた。部自体の存続が問題となつていたが、三年次にある程度皆の努力で部員が確認され、何とか維持できた。

今思えば、一年後輩の宮下たちも大変だつたようである。今回、40周年を迎えることに大変喜びを感じる次第です。

とりとめもないことばかり書いたような気がしますが、今後、後輩たちとOBたちのきずなを深め、さらに飛躍できるよう微力ながら協力したいと思う、今日この頃です。

想い出探偵団

二十六回 島田 信 二

二十六回の卒業生は僕と山本の二人だけで、前年二十五回が宮下さんと田代さん、そして後輩の二十七回は中尾、小江、坂口の三人で福高ヨット部創設以来、最も部員が少ない時代であつたと思います。宮下さんと田代さんが引退されて、一時は部員が三名という時期もありました。こんな状況のなか、部員だけではオッチョイもできず、常に竹園さん、伊藤さん、真鍋さん、

齊田さんら、OBの方々のご協力により、どうにか練習を続けることができました。土、日の練習では現役よりもOBの人数が多いこともしばしばでした。今考えれば、私たちの代はまさに部の存続が危ぶまれる危機的状态であつたといえます。当時、コーチであつた竹園さんは、「おれが一人だけになつてもヨット部を続けさせる。絶対つぶさせない。」とおっしゃつたのを記憶しています。当時はやつていた青春ドラマのように、そこには熱情コーチ、汗、海に沈む太陽の三点セット（もちろんヨットも）が揃つていました。今年で創部四十周年となりましたが、ここまで続いてきたのも現役だけの力ではなく、コーチを含め、まさにOBの方々の努力の賜物といえます。

私たちの代における最も大きな出来事は、長年福高ヨット部の練習の場であつた百道の浜から、大岳に移つたことがあげられます。百道の浜は、今は埋め立てられて昔の面影をとどめていませんが、当時も徐々に砂浜が後退し、だんだんヨットを置けるスペースが少なくなつていったのを憶えています。海の色も年々赤茶けてきて都市化の流れは容赦なく押し寄せていました。移転した大岳は百道と違い、位置の関係から波がたつことが少なく、かなり異なつた印象の海面でしたが、海水や浜はまだあまり汚れておらず、気持ち良くヨットに乗ることができました。大岳の艇庫はOB、

現役による手造りのもので、素人ながらかなりよくできていたと思います。ドアもなく、アバラ屋に近いものではありましたが、十分にその機能を果してくれました。

OBの方々のご尽力にもかかわらず、私たちの代の成績は今一つパツとしなかつたことを申し分けなく思つています。現役のみなさん、こちらで全国制覇の夢を再度実現して頂きたい。それと同時に、福高ヨット部で博多湾に青春の美しい航跡を残してください。

現役時代の思い出

二十八回 川 浪 隆 司

現役の頃と云えば、パワーというか若さというか、派手な事が一番似合う時代という気がします。現役諸君、頑張るように！

さて、今は昔の懐し物語をば……。

（その一）一年生の春遠からじ三月初旬。強風の中で強気に練習したものの、スナイプ、FJ共現役は全艇沈して（その内一艇は、デスマスト）寒さで皆んなバテてしまつたんです。それじゃあ、ということ陸へ上つてタキ火しながら、暖まるからと云つて、OBの

方々から冷酒をいただいて、宴会が始まったんです。
(ここまでは、まあ普通)とところが勢い余つて、全員完全にブツンしてしまい、家の窓ガラスを割る人や、途中の道ばたで寝るのはのていたらく、おまけに次の日が日曜で練習日であるのに私が遅刻して行つたら来ていたのはOBの人達と現役は坂口さん一人だけ。全員二日酔いで、練習にならなかつたケースはあんまり聞かないのでは？

(その二)二年生のインターハイのでき事です。

愛知県蒲部であつたんですが、開会式前日、他校の生徒は、海面へ出て練習(三十艇位?)していたのですが、そこへ突然の前線通過。これが、すごい何のつて今まで見た事ない代物でした。海へ出てたヨットは当然あつという間に沈。今から出ようとしていたハーバー内の艇も沈。さらに、ハーバー内の船台に置いていたFJが「ふわつ」と浮き上がり船台の横に「ドシャン」と落ちたのにはビックリ。タイトスカート(ミニスカートではなく)の女の子のスカートでさえめくり上がり、Tシャツもまくれ女の子達は地面にしゃがみ込むしか手のうちようがない光景は嬉しかったものでした。

(その三)同じく、インターハイでの事です。

FJ級の出場で陸勤だった私はヒマだったものですから、当時コーチだった真鍋さんが冗談で『川浪

福高の校旗をメインポールに掲げてんやい。』と云つた言葉に飛びついて国旗(日の丸)しか、掲げたことがないというメインポールにしつかり福高の校旗を掲げてしまいました。五分後位にはハーバー本部よりマイクで、キャプテンの呼出しがかかつて当時のキャプテン中尾さんが怒られてましたけど：美しかったなあ。

(その四)男の涙。三年の頃私のクルーしていた江田が自分のミスに責任感じてくれた事や、コーチ時代に永田や新が送別会の際に『勝ちたかつた：』と云つて悔し涙流した事とか、男の泣く姿を見る機会とかそういう熱いハートの奴に会うこととか、他では味わえないと思う。

最後になりましたが、四十周年を迎えるにあたり、色々苦勞されてきた諸先輩方に感謝すると共に、何はともあれ、現役諸君の頑張りによる好成績を期待しております。

昭和
54
～
63
年度

第 四 期

- 軟派あり、硬派ありで、バラエティーに富んでいた。(30回 江藤)。
- 部員数問題、艇庫問題(名島でのるか、小戸でのるか)。(34回 池内)。
- 明るく楽しかった。練習中は、皆、気合いが入っていた。(37回 須河内)。
- みんな一致団結して、練習にも熱がこもる。(38回 池田)。
- 人数は少なかったが、楽しかった。(39回 横大路)。

福高ヨット部沿革 (第Ⅳ期)

年度	記 事	顧 問	監督・ コーチ	主 将	部員数	艇	艇 庫	
昭和 54	◎S級「ぼんくら4世」進水 (奥村ボート製作所) ・FJ級インターハイ出場 15位 ・S級国体出場 26位 (部費 20万円)	和田先生 永島先生 高嶋先生	コーチ 20回 真名子	30回 渡 辺	3年 6人 2 7 1 3 計 16	S級 6 FJ級 6 (新ぼんくらⅣ)	名 島	
55	・S級インターハイ出場 12位 ・S級国体出場 17位		コーチ 28回 川浪	31回 宮 田	3年 7人 2 3 1 7 計 17	S級 5 FJ級 5		
56	◎S級「ぼんくら5世」進水 (奥村ボート製作所) ・S級インターハイ出場 12位 ・S級国体出場 9位	高嶋先生 和田先生		32回 楠 本	3年 3人 2 4 1 10 計 17	S級 6 FJ級 4 (新ぼんくらⅤ)		
57	◎S級「ぼんくら6世」進水 (奥村ボート製作所) ・S級国体出場 26位	高嶋先生 古賀先生		33回 永 田	3年 4人 2 1 1 4 計 9	S級 6 FJ級 3 (新ぼんくらⅥ)		
58	・志賀島合宿 ・部室がプール下に移る。 (部費 20万円)	高嶋先生	コーチ 30回 江藤 " 渡辺	34回 池 内	3年 1人 2 5 1 2 計 8	S級 6 FJ級 3		
59	◎5月17日 8代顧問 永島 章先生逝去			35回 江 崎	3年 5人 2 1 1 8 計 14	S級 4 FJ級 2 (76 ぼんくらⅣ " Ⅴ " Ⅵ)		
60	◎8月8日 3回 大島喜代治氏逝去 ・S級インターハイ出場 18位 ・11月3日 35周年合同追悼式 (名島浜) ◎FJ級「585」進水(辻堂加工)		コーチ 28回 十川 30回 江藤 " 渡辺	36回 山 口	3年 1人 2 8 1 6 計 15	S級 4 FJ級 3 (新585)		
61	・合屋君、ラダー漂流事件 ◎4月 名島艇庫撤去 本拠地を小戸ハーバーへ移す ・S級国体出場(山梨) 26位 ◎12月31日 26回 山本真也君逝去 (部費 24万円)		コーチ 24回 横川	37回 内 村	3年 8人 2 6 1 3 計 17	S級 4 FJ級 2 (277 585)		小戸ハーバー
62	◎S級「ぼんくら7世」進水 ・S級国体出場 26位 (部費 20万円)			38回 松 原	3年 6人 2 3 1 9 計 18	S級 5 FJ級 2 (新ぼんくらⅦ)		
63	・7月東京にて、OB懇親会 ・" 「40周年実行委員会」設置 委員長 18回 平野	中島先生		39回 山 本	3年 3人 2 7 1 2 計 12	S級 4 FJ級 3 (県連より 貸与1)		
平成 1	◎8/12 40周年記念総会・ 祝賀会 8/13 40周年記念クルージング		コーチ 須賀内 権文 熊本 松原 栗須 池田	40回 中 井 (現役)	3年 7人 2 3 1 18 計 28	S級 4 FJ級 1 (ぼんくらⅣ " Ⅴ " Ⅵ " Ⅶ) (585)		

ヨット部顧問の経験

九代顧問 和田守夫

昭和53年4月から、正顧問あるいは副顧問としてヨット部に関わりを持った和田守夫です。

当時は、新任教師として福岡高校に赴任して二年目で、ヨット部の事などよく知らないまま顧問にさせられたという感じだった。

故永島先生から、ヨット部顧問としての仕事の内容を聞いた時は、土、日曜がつぶれるという事ではないへんな部をひきうけたと思つた。岩石先生や野上先生からもいろいろな励ましや脅かしをうけた。

さて、53年度一年間だけでも、鹿児島での九州大会（FJ級優勝）、東北での全国大会そして例の「海上保安庁事件」と、いろいろな事を体験した。

翌年、高嶋先生が新任として福高に赴任したので、副顧問になつてもらい2人のヨット部を通じてのくされ縁がはじまる。彼と正副顧問を交代したのはいつの年だっただろうか？

志賀島での夏合宿（補習期間中に合宿をしたので、生徒は補習を受けず、私だけが補習をするために、志賀島から学校に通つたりした。）百道のピオネ荘での

春の強化合宿、宮崎での九州大会、そして国体、江の島での全国大会。（成績に関して、あまりいい思い出はない）名島から小戸ヨットハーバーへの回航。福岡での九州大会運営で、こまじだったこと。

思い出を列挙すれば、まだまだ限らないが一番苦しかったのは、練習中の本船でのたいくつな時間だろうヨット・レースのルールがわからない初期のころは特にそうだった。それから、ふりかけが一番のごちそうだった合宿の食事も忘れられない。

とにかく、他の運動部の顧問では経験できないような事ばかりだった。学校の体育館や運動場では活動できないヨット部の特徴からだろう。

そのせいか、私以後ヨット部の顧問は、新任の先生か、転任してきた若い先生がなるような慣習ができた。最近若い先生がふえたがほとんどの先生は、ヨット部の顧問（副顧問を含めて）を経験しているはずだ。

最後に今後の方向について述べさせてもらうなら、OBのみなさんが熱望する「全国制覇」するには、今の練習では、なかなか困難だということ。つまり、全国レベルは年々上がってきているので、昔と同じような練習方法ではどうにもならない。あるレベルまでは達してもそれから先へはなかなか上達しない。博多湾だけ練習していたのでは井の中の蛙だという事を全国大会の引率で痛感した。実現は困難だが、他の地区

との合同練習などで刺激を受ける必要性を感じる。「全国制覇」をめざすなら、他地区の練習をもっと研究する必要がある。

かつてな事を書きまくった気がしますが、ヨット部の今後の発展を祈ります。

何もできなかつたけれど

十代顧問 高嶋 徳 久

昭和五十四年四月、私が新採の教員のころ職員室の机にすわっていると、故永嶋先生が話しかけてこられた。「君、ちょっとヨット部をみてくれない」「いえ、いえ、ヨットなんて、僕全くわかりませんよ」「いや、いい」といいと何もせんではないと。見とくだけでいいから。こうして、私とヨット部との関係が始った。試乗会の時、植原君に初めて艇に乗せてもらい、予想外の小ささに驚き、S級とFJ級の二つがあることを教えてもらった。それから早いもので九年、ヨットの知識も少しずつ増え、土、日には天気や風が気になるなど、やっと顧問らしくなりつつあった時に転勤ということになった。

今、九年間を振り返ってみると、ヨット部顧問とし

ての時間は、総じて楽しいものではなかったような気がする。技術的な裏づけのない私にとって、ヨットは一生懸命やろうにも、やりようのないスポーツであったからだ。生徒のために頑張りたいと思っても、私にできることは何もなかった。永嶋先生の言われた「何もせんではない」というのが、かえってどんなに苦しいものであるかを実感させられた。

では何故に、9年間（副顧問時代を含めて）も、ヨット部の顧問を引き受けたかというそれは、生徒達の一生懸命頑張る姿に胸うたれたからに他ならない。進学校という苦しい環境の中で、部活をつづけあるいは、厳寒の真冬にも出艇して行く彼らの真摯な姿は、何もできないだけに、よけいに私の心を打った。この生徒達に私がしてやれることと云ったら、せめて顧問として面倒をみてやることしかなかった。とても、顧問をやめるなどとは言い出せなかった。

そして、今、思うと、このヨット部顧問としての時間は、私にとって貴重な経験だったのでないか。なぜなら、一生懸命に頑張る生徒達、そんな生徒達の姿に胸打たれながら、何か少しでも彼らの役に立てることとはないかと願う自分、ここに私の教育の原点があるような気がするからである。今でも、江崎や永田や山田や内村たちの姿を思うと胸に熱いものを感じる。これがある限り、私は、私の教育的情熱を失わないだろ

うと思うからである。

最後になって申し訳ありませんが、本当に何もできない私を支え、面倒をみて下さった福高ヨット部のOBの方々、福高の先生方、そして、九州産業高校の松山先生、西南高校の山口先生、博多女子校の前先生、横手先生には、心から、お礼を申しあげたいと思います。本当にありがとうございます。今後とも、よろしくお願いいたします。

ひょうたんから駒

三十一回 小 阪 元 成

私にとって何が一番のヨット部での思い出か？原稿の依頼に伴ない改めて考えてみると「これだ！」というものはない。

そこで一番華々しかったことを以下綴ってみようと思う。

それは56年のインハイ県予選のことだった。当時、31期のスナイプ乗りは私の他に井手と久保がいて、インハイを前にして、井手・久保ペアと小阪・中尾ペアでのぞんでいた。

そして、県予選の時、井手・久保ペアは「ぼんくら

Ⅳ」に乗り、小阪・中尾ペアは「76」に乗ることに決め、県予選突破のため「ぼんくらⅣ」を先行させ、「76」が他艇を抑える作戦をたてた。

試合当日の朝10m/sの風が吹き、本船から少し離れると、合図のホーンは全然聞こえなかった。

第1レース、予定どおり「ぼんくらⅣ」は好位置でスタートし断突のトップでフィニッシュし、「76」は2位だったと思う。沈等で大番狂わせがなければ作戦どおりいける、そう思ったとき「ぼんくらⅣ」が「76」の側に来て言うことは、

「俺達くさ、スタートばリコールして失格げな。」

何ばしよつたとや

「リコールがあつたやら全然聞こえんかつたとい、そやけん、お前ら絶体1位ば取れよ。」

何をおつしやるウサギさん、と思つたものの口からは「くそつ」しか出なかつた。

第2・3レースとも「ぼんくらⅣ」「76」の1・2フィニッシュこの後には13と15m/sになつていた。

「もう中止にすればよか」と中尾がいう。しかし第4レース開始時刻の通知。第4レースか第5レースが最終レースだった。この最終レース、第1上マークも廻ると、トップを「ぼんくらⅣ」が走り「76」は4位くらいだったと思う。各艇の間はそれぞれかなりあいており、やばいな、と思つたのもつかの間第1下

マークを廻るころには、前の2艇とも沈をしてくれたこの瞬間私と中尾の頭には「沈をしなければ優勝だ」これのみだった。

結局、全レース終ってみれば「76」の優勝は当たり前として、「ぼんくらⅣ」も第1レース以外はオールトップフィニッシュで2位だった。貰う予定でなかった優勝旗を貰い、まさに「ひょうたんから駒」ではあったがほっとした。これが一番思い出に残っているレースだが、ヨット部に入ってよかったなと一番思ったのは、卒業式の時の胴上げだ。春には又同じ門を通って別の建物に通うことにはなったが、きつかったことなど帳消しにする値があつたと思つたと思つた。これからでもできる限り続けて欲しいと思つた。

雑感

三十四回 池内 一 誠

私がヨットと出会つてから、かれこれ九年になります。もちろん、私がヨットと出会つたのは福高ヨット部においてでした。ヨット部の三年間を、簡単にふり返つてみたいと思つています。

三年間でいちばん記憶に残つてゐるのは一年の時で

す。入学後すぐの部活ガイダンスの時、登山部にも行くかうか、と思つていた私を、当時3年生だった楠本先輩（だつたと思つています）が8ミリの写真会に連れて行き、帰る時には既に名簿に名前を書かされてしまつた。この時の私の運命は決まつたわけです。試乗会では、まだ当時レース艇だった23464に乗せていただき、そのデッキの白かつた事が印象に残つています。長崎での九州大会にも連れて行っていただきましたがその時の黄色のそろいのポロシャツは、長崎の街でやたらと目立つたものでした。夏の合宿も、艇の中にカニが入つて指をはさまれたり、練習中にカミナリに追いかけられたり、といつた小事件がおこつたりして、きつい中にも楽しいものがありました。また、練習中に艇のガンネルに人指し指をはさみ、もう少しで指がなくなる目に遭つたのも一年の夏だつたと思つています。

このあと私は二年時は有村先輩のクルーとして、また三年時は部を率いていくわけですが、このように部の中堅・トップになつた時の思い出は、部員減の問題、練習場所の問題、体の故障等、実際に部を運営していく上での苦労ばかりで、一年の時のような楽しい思い出というものは少なくなります。やはり一年の時の方がヨットを純粹に楽しむことができたのでしよう。ただ、二年時の、鹿児島での九州大会で、夜中に桜島が爆発した事、翌朝ハーバーに行くと、艇が灰をかぶつ

ていた事、選手宣誓をしたのが最近女性ひとりで太平洋を横断して話題になった今給黎さんだった事などではつきり覚えていきます。

高校時代はひとつも満足な成績を残せませんでした。卒業後、すぐにレーザーに移り、ずっとヨットと関わってきました。今ではレーザークラス協会の事務の一端も行なっていますが、レーザーの世界というのは、高校の時のヨットの世界とはまた違った雰囲気をもっています。私が卒業後6年間もヨットと関わる事ができたのは、福高ヨット部において、ヨットのもつ魅力（楽しい面のみならず辛い面なども含めた上で）を教えていただいたからでしょう。これからも、このことに謝意を感じつつ、ずっとヨットと関わりつづけていたいと思っています。

福高ヨット部の思い出

三十五回 旭 俊 哉

早いもので、私のヨット歴も、福高ヨット部に入部し、九大ヨット部の四年間と合わせて七年目になるうとしていきます。この度、福高ヨット部四十周年記念誌に原稿をとということ、諸先輩方は、軌むマストの音

や、バタつくセールの音など思い出すのでしようが、私は未だに現役セーラーですので、特に感慨深いものもないのですが、思いつくままに、書かせて頂きたいと思います。

私が入部した年の夏合宿は、名島で十日間程行なわれました。この合宿は、高校時代で、精神的にも、肉体的にも最もハードであった様に思います。私が一番戸惑ったのは食事当番でした。初日の朝四時、鳩の鳴き声と共に起き、目玉焼きを作ろうと張切ったのですが、やったこともないので火傷はするわ、時間は遅れるわで、結局ベークンが生焼けで一同の顰蹙をかってしまいました。その後、昼にサンドイッチを作って汚名返上したのですが、晩には再び顰蹙をかう結果となりました。この合宿は夏場にしては珍らしいぐらいに吹き、疲れがたまつて、早朝練習は、ほとんど夢の中でした。練習後のトレーニングは、如何に負担を減らすかを考え、特に足上げが苦手であった私と山田は、トレーニング前に素早くジャージ、靴下を脱ぎ、靴は軽いものに履きかえるなど、努力の限りを尽くしていました。

冬になると、部員の数も減つていき、上級生は池内さん唯一人、一年生も三人となり、私と江崎はFJに乗る予定でしたが、スナイプ級に転向し、それでも毎週、出せても二艇という状態で、淋しいものでした。

三年生の春休みに県連の合同合宿が行なわれ、夜になつて修猷館・九産などの気の合う奴等だけで焼鳥屋へ飲みに行つたことがあります。全員みごとに酔ばらい、大声上げながら西新をねり歩き、しまいにはミスタードーナツの前に捨ててあるドーナツを食い散らかしながら合宿所へ戻り、お土産などと称し、九産の松山先生に渡したところ、翌朝先生が腹をこわしてしまふという事件が起こり、一同反省することしきりでした。(しかし、私達はそれにも懲りず、九州大会でも、他校の下級生にしま酒を飲ませ、ホテルをゲロだらけにするという事件を起こしてしまいました。以上つまらぬことを書かせて頂きましたが、福高ヨット部では様々なことを学び、そしてなによりもヨットを愛し、充実した学生生活を送らせて頂きました。これからの生涯、ヨットから離れることはないと思いますが、私に、そのような機会を与えてくれた福高ヨット部に心から感謝しています。

最後になりましたが、福高ヨット部40周年おめでとうございます。今後の後輩諸君の、インターハイでの活躍を心から、お祈り申し上げます。

福高ヨット部で学んだ事

三十六回 山口 隆

高校生活の三年間、福高ヨット部で過ごせた事を幸せに思う。

博多湾で多くの先輩と後輩に出会えた事を誇りに思う。

一年、部を辞めようとした自分を、説得してくれた旭さんに感謝しています。

二年、素晴らしい後輩達に出会えた。又、練習面での問題から、練習場所を名島から小戸へ移して下さった、コーチの渡辺さんと江藤さんの配慮を有難く思います。

三年、三年間で最も充実していた年。目標だったインターハイ出場は果たせたが、結果はボロボロ。インターハイに勝つ気で来る奴と参加しに来る奴の違いがはつきりわかった。「参加する事に意義がある」なんて言葉は、嘘だと思う。参加するからには、万全の準備をし、必ず勝つ気で望まなければ、絶対に勝てない。また、その次元で勝負してこそ、初めて意義が生まれてくるものだと思う。創部四十周年の今年、現役には「全国制覇の目標を達成しました」という報告を期待

しています。

三角波の一節より

三十七回 内村 祥史

―母なる海。僕等は皆、母親の胎内にいた時、羊水に取り囲まれていた。もちろん誰もその時のことなど知りはない。だが人間の出发点がそこである以上、彼がそこへ帰りたい、あるいは憩を取りたい、と願うのはごく自然なことではないだろうか。母の胎内の海、母という名の海、僕等は絶えずその永遠なる海への回帰を想い、「海」という image、あるいはその実体を追うのである。―

これは私のいるヨット部の部誌に出てくる一節なのですが、私自身非常に共感を持ったので、福高ヨット部の仲間に伝えたいと思います。私たちヨットマンの根底にある共通の気持ちのもとに、四十ある代すべてでまとまりませんか。そうすることによつて、福高ヨット部OB会が団結し繁栄していくことを願います。

A great future is reserved for us

三十八回 松原 正信

苦学の末やつと福高に入った僕は、真面目一貫だった。部活はサッカーかバスケか柔道に入ろうと思つた。ところが、部活を見学して歩き回っている時に、運悪くヨット部の須河内先輩。熊本先輩に身動きをとれなくされ、そして毛の頭ほども予想しなかつたヨット部での生活が始まつた。勿論やめようと思えば試乗会が終わつてもやめられたはずである。そうしなかつたのは一つの深い理由があつた。実は僕にとつてのインテリミットな女性が博女の試乗会に来ていたのである。しかしその人は二度とハーバーに姿を現さなかつた。そういうことである。それを知つた時にはもう僕は正式な部員になつていた。このようにして三年間が始まつたのだが、入部してから三ヶ月位は何もかもが新しく、楽しかつた。ところがタックジャイブなど基本が一通りこなせるようになると、次に「きつさ」が身にしみてきた。ここでの「きつさ」とは、勿論クルーでハイクアウトした時のこれである。本當にきつかつた。以前はじゃんけんで勝つた奴がクルーになつていたのだが、負けた奴がなるようになっていた。特に内

村先輩のクルーは、とびぬけてきつかった。その内村先輩のクルーを、僕は同期の連中の中で一番多くやった。確かにきついことはきついのだが、部活をやめようとは思わなかった。なるべくきつくならないように、家で腹筋をやったり、テレビを見ながら足あげをしたりしていた。そうこうしているうちに二年になり、スキッパーをはじめから、ぐっと面白くなった。その頃から僕の頭の中はヨットが半分以上になり、部長になつたときには八割以上に達した。当然反比例の法則で一年の頃常にクラスで十位以内だつた成績が、ワースト3に常に入るようになった。そしてその頃は部活は土日休日のみだつたので、平日は友達の家に行って終電まで遊んでいた。成績が下がるということは授業が面白くないということであり、朝補習は週休三日制だつたし、今から考えると信じられないような馬鹿なことをたくさんした。正直言つて退学を意識したことも何度もあつた。学校内ではそんな風だつたが、部活だけは一生懸命練習した。しかし九州大会では、見事に負けた。サイド下の時に沖繩の艇がザザッと抜いていったのを、今でもはつきりと覚えている。そういえば自分達はクローズの練習は真面目にやっていたがフリーは練習の間の一休みと考えるちんたらやっていた。これが敗因だ。しかし気付いた時にはもうおそかつた。そして僕には「三年間ヨットづけどつた」とい

うことだけが残つた。
できるならもう一度。現役の九州大会に同行してつくづく思う今日この頃である。





現役時代を振り返って

三十九回 山本圭剛

興味本位で入ったヨット部であったが、当初は何もかも未知の世界であった。あの初めてヨットに乗せてもらい、海面をスーッと走り出した時の感動は今でも覚えている。しかしそれとは裏腹に練習は非常にきつかった。特にきつい思いをしたのは、半分眠っていた早朝練習、練習の後のトレーニング、虫が飛び交う中のミーティング、寝る時は布団の取り合い。炎天下の志賀島一周マラソン、こんなことをやった合宿と、身を切るような寒さの中のセーリング練習である（今ではいい思い出が）。

自分達の代は三人と非常に少なかったが、女子部員がいたせいかとても明るく活気に満ちあふれており、ガッツでは負けなかった。自分達のコーチは嶺川さんで、厳しいコーチであった。意見の行き違いでよく討論したが、嶺川コーチのおかげで練習が非常に引き締まった。顧問の先生は高嶋先生から中島先生へと変わったが、どちらの先生方にも大変お世話になった。いろいろな面で迷惑をかけ、心配させてしまった。締める所は締める優しい先生方であった。

艇の数はスナイプ四杯とFJ三杯（この内一杯は県からお借りしたもので、恵まれていたと思う。それにしては今一戦績がふるわなかつた。スナイプ級は県大会を突破することができなかった。あの時の横大路のくやしそうな顔は忘れない。共に三年間敵しい練習をしてきただけに、自分のことのようにくやしかつた。結局九州大会には自分と西山の二杯が出場した。初日三位で、これはいけると思ったが、最後で風が敵に味方し、インターハイ出場は夢に終わった。あの時のくやしさは一生忘れることなく自分の心の中に残るだろう。とにかく自分達のヨット部生活は九州大会で終わった。

福高ヨット部も今年で四十周年を向かえるわけだがこれを機によりいっそう発展することを望む。そして自分達が成し遂げることができなかったインターハイ国体出場及び上位入賞を成し遂げて欲しい。

Ⅳ 現役の詩

【顧問】

活動状況について

福岡高校ヨット部顧問 中 島 良 博

この度のヨット部創立四十周年、誠にお目出とうございます。

昨年度より第十一代顧問を務めていますが、四十周年ということを聞きますと、今さらながらにその伝統の重みと責任を感じているところです。

さて、現顧問として、ヨット部の現況をお知らせします。

〔部員数〕 三年 七名（含、女子二名）

二年 三名

一年 十八名（含、女子三名）

マネージャー 四名

以上三十五名で構成されていますが、三年は実質的には引退しており、二年の今岡（部長）、山内（副部长）、瀬戸の三人が元気のいい一年生を率いて部活をリードしてくれています。

〔戦績〕 昭和六十三年度・平成元年度の二年間の戦績を概観しますと、特徴的なのはスナイプ級の不

振と、FJ級の健闘、女子部員の頑張りの三点を挙げることが出来ます。スナイプ級（男子）については、昨年度、本年度ともに県大会で惜敗、九州大会への出場権を得ることができず、伝統のスナイプとしては厳しい結果だったと思います。

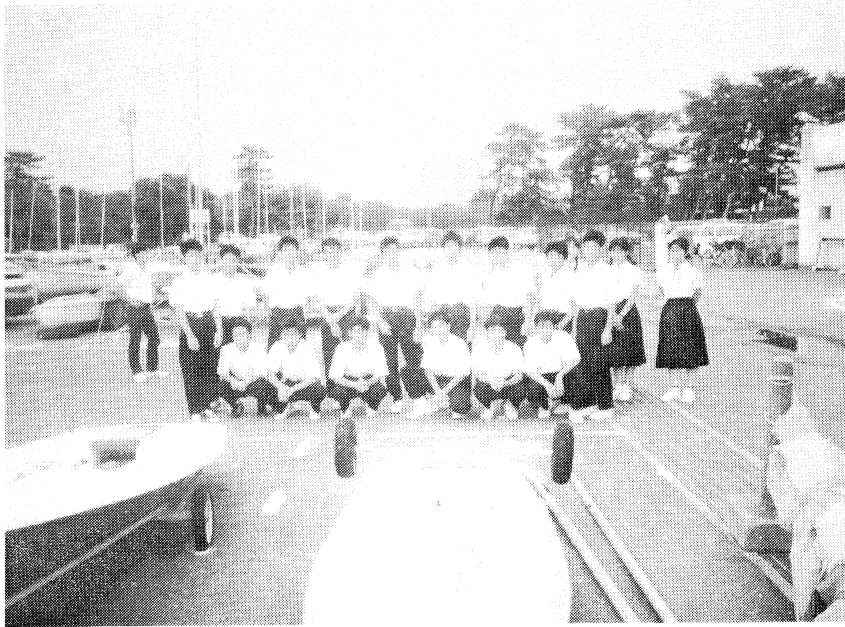
FJ級は二年連続、九州大会出場を果たし健闘しています。特に昨年度の山本・中井組は、四位で全国大会に今一步のところまでいきました。

また女子スナイプ級は体力的なハンディを乗り越えて頑張っています。しかし、博多女子、唐津勢の壁は厚く、これからのよりいっそうの頑張りが期待されています。

以上のような現況ですが、特に戦績については樂觀できる状況ではありません。この不振の原因のひとつは、練習時間の少なさです。これは本校の地の利の悪さにも起因していますが、平成二年度飛梅国体にむけての指定校特別練習が西南・博多女子両校で行われていたことによる相対的な練習量減少もその一因です。この指定校制度によって前掲二校は鳥取、光、唐津、高松等への遠征を行い試合経験を積み、確実に力を付けてきています。この厳しい状況は国体終了までつづくと思われませんが、だからといって手をこまねいていくわけにはいきません。出来る限りの努力をおこな

ってベストを尽くしていきたいと思っておりますので、これからも御理解、御支援のほど宜しくお願いいたします。

簡単ではございますがこれで現況の報告と御挨拶にかえさせていただきます。



小戸のハーバー 122 現役たち

【三年】

前キャプテン（FJ級） 中井 信介

山本先輩と出場した唐津での九州大会、そこで唐津西高に屈辱の負けをした。その時、来年は必ずインターハイに出場してやる、そう思った。それから念入りに練習計画を立て、一年間必死に練習したつもりだったが、宮崎では、夢を果たすことができなかった。

今思うと、もっと努力すべきだったと後悔の念も感じられるが、最後まで自分達を見守ってくれた先輩達、最後まで自分達に尽くしてくれた後輩達を得ることができ、満足している。

そして、ヨットを通じて、とてつもない大自然に触れることができ、貴重な体験をさせてもらったと思っている。

どういう理由で入部したか分からないヨット部だった。夏の合宿、冬の海を体験した時など何度かやめたと思った。それでも三年間続けてこれたのも、先生方、OBの方々の熱いご支援のおかげだと思う。最後に二年生は、インターハイをめざしてがんばってくれ。

(FJ級) 片岡 浩

このような機会を与えられ、自分の3年間を振り返ってみると、つらかった事よりも、楽しかったことの方が多く思い出される。

最後のレースは、決して満足のいく結果とはならなかったが、それ以上にヨット部で得たものは大きいと思う。

これから、1・2年生は夏の合宿や冬の練習などつらいことも多くあると思うが、3年間やめずにがんばってほしい。2年生は部員も少なく、他校と比べてもなかなか厳しいと思うが残された1年間精一杯がんばればインターハイ出場も夢ではないと思う。また1年生は部員は多いが、それだけに他校との争いだけでなく部内でもお互いに競い合わなくてはならないので、そのことを肝に命じて積極的にこれからの活動に励んでほしい。

最後に、ヨット部を陰で支えて下さったOBの方々、3年間本当にお世話になりました。

(S級) 沖 俊 宏

ヨットとの三年間は、長そうで短かった。まず夏の合宿。朝はやくねむかった早朝練習。夕方の厳しいトレーニング。ふろもろくに入れなかったの

が、印象に残る。次に冬の練習。寒さと感覚との戦いだった。ティラーをにぎる手が、メイシットをもつ手が、だんだん感覚がなくなっていく。本当に自分との戦いだった。そしていよいよ本番であるインターハイ県予選。逆転、逆転で最後まできわどい大会であったが、結果的には、負けてしまった。本当にくやしかった。その瞬間、僕の福岡高校でのヨット部生活は、幕を閉じた。

いろいろなことを挙げたが、一つ一つが思い出として、胸に残っている。またわずか三人で本当に大変であった2年生、短い間であったがにぎやかであった1年生、陰で支えてくれた先生、OBの方々、最後までありがとうございました。

最後に、2年生、来年はたのむぞ。

(S級) 宮 本 幸 彦

福高ヨット部で送った大半の高校生活を引退後振り返ってみると全体的に満足のいくものだったと思う。このヨット部中心で送った高校生活はこれからの自分に大いに役立つ時がくるだろう。たいへん貴重な体験であった。ヨットに乗り、一艇で海に出ると自分のちっぽけさに気付く一方、自然の偉大さに気付く。ヨットのおかげで自分の存在を確信することができ

たと思う。またあらゆる方向から人間をみれるようになったと思う。このようにヨットはすばらしい事ばかりを自分に教えてくれた。話はあるが後輩のみんなには頑張ってインターハイにでてもらいたい。

(S級) 川上 武志

地獄のような夏の合宿、真冬のセーリングなど、思い起こすと本当につらい三年間であったが、ヨットを知り尽くすにはあまりに短い三年間だった。レースの結果も満足のできるものではなかったけれど、ヨットを通して得たものはとても大きくかったと思う。そして、後に残る後輩達にも僕達以上に頑張った良い成績が残せることを、大自然の中で悔いのない三年間をおくれることを期待したい。素晴らしい先輩達、仲間達、後輩達とともに経験したこの貴重な三年間を僕は一生忘れないだろう。

最後に、自分達を支えてくれたOBの方々、先生方、短い間でしたが、本当に今までありがとうございました。結局悔いを残して終えることになりましたが、この三年間、ヨットを通して、大自然を通して学んだことをこれからの人生に役立てていききたいと思えます。

今思うこと

(S級) 池永 玲子

思うようにいかなかった最後の大会を終えて、ほとと一息ついたが、その時のくやしさは今も捨てる事が出来ない。一方、三年間続けたんだという満足感も少しはある。

振り返ってみると、あっという間に過ぎた様でいろんな事があった。スキッパーを始めた頃、吹くたびに沈んでいたし、ジャイブで、Mコーチを海にふるい落としたこともあった。ミーティングでは、いつもレベルの低い質問をして、あきれた顔をされたものだ。

こうして私の三年間は終わったわけだが、自分の反省として、一、二年生に願うことは、目先のことにたわれず、計画的に練習を積んでほしい、そして又、たくさん本を読み、それを確実に生かせる状態になる所まで、自分の技術を高めてほしい、という事だ。

最後になりましたが、OBの方々、先生方、今まで本当に有難うございました。

忘れられないヨット

(S級) 内村飛鳥

私の部員としての三年間は常に、〃やめる、やめない〃の葛藤の中にあっただので、ともすれば〃やめる〃方に傾く私をここまで支えてくれた人達、そして私にヨットと接するきっかけを与えてくれた西山先輩には心から感謝しています。

引退した直後は、「シートベルトを！」という交通安全の文句が、「フットベルト！」と見えて〃はッ〃とし、テレビのCMでクルーザーが映れば、決して楽しい事ばかりではなかったはずの現役時代が思い起こされ、無性にヨットに乗りたい衝動に駆られました。

レースに臨む為の知識やタクティクスを習得するにはあまりにも短か過ぎる三年間で、ろくな成績を収めることなく引退する部員ですが、ヨットは私に掛替えない数々の貴重な経験を通して、様々な事を数えてくれました。

私はヨットと海が大好きです。

【二年】

「目標を目指して」

新キャプテン(S級) 今岡昌史

我々福高ヨット部は現在二年生三名、一年生十八名(内、女子三名)計二十一名で、日々練習を積み重ねています。

今年是一年生にも恵まれ、ヨット部は活気ある部となっています。この多人数をまとめていくためにも、挨拶・整理整頓・時間厳守という三大原則を徹底させ、しまりある部活にしていこうと思います。一年生はまだ、これからつらいこともあると思うけど、やめずに続けて行ってほしいと思います。

今年惜しくも、九州大会で敗れてしまいました。先輩達が果たせなかった分、部員全員がヨットに対して情熱を傾けて、インターハイ・国体出場及び上位入賞という目標を果たさそうと思います。

最後になりましたがこれからもOBの方々の御指導をよろしく願います。

目 標

(S級) 瀬 戸 宏 樹

今、私は目標をまず8月下旬にある新人戦優勝においてがんばって練習をしています。土、日は他校と合同練習をしています。福高は他校とくらべると二年の人数が少なく、新人戦にはスナイプ・FJ級共に一艇ずつしか出られないので、自分たちにすべてがかかっていると気合いを入れてがんばろうと思います。

しかし一年生は男15人、女3人と、人数が多いので互いに助け合い、ライバル争いをしてうまくなっていくってほしいのです。私は、トレーニングコーチとして楽しい部活をしていきたいと思うけれども、決してだらけた雰囲気だけはつくりたくないと思います。

OBの方々、これからも熱心、また厳しい御指導よろしく願います。

抱 負

(FJ級) 山 内 俊 介

スキッパーをやるようになって、早くも三ヶ月がたち、FJを走らせるのにも、だいぶ慣れてきました。

FJの二年生は一人しかいないので、下級生のクルーと組んで、レースに出ることになりますが、今年のFJの一年生は人数が多く、やる気があるので、大丈夫だと思います。福高ヨット部は、平日にあまり練習ができないので、土日にしっかり練習をして、他の高校に負けないようにしたいと思います。九州大会で先輩達が負けた時のくやしさを忘れないようにして、これから一年間、しっかり練習をしていきたいと思っています。そして、来年の夏の大会の時は、悔いが残らないように、がんばります。

【一年】

(S級) 原 慎 一

僕がヨット部に入り数ヶ月たった。ヨットの事も入部したばかりの時よりかなりわかってきた。しかし、ヨットの事がわかっていくにつれてヨットの難しさもわかってきた。そして、その難しい事をさばいてしまう先輩達を関心し、僕も先輩達のようになれることを夢みている。今持っている夢を実現して三年の先輩達が果たせなかった九州大会またはインターハイ出場を目標としてこれからがんばっていききたいと思う。

(S級) 中村 義弘

僕は最近ヨット部に入って本当によかったと思っている。それは、ヨットにのって、はらむセールをなおひけばきしむマストの音が心地よかったりするからだ。でもまだタック・ジャイブの腕前は未熟だったからいっしょうけんめい練習して一人前のヨットマンになって夕日が沈む志賀島をみたい。

(S級) 進藤 晃司

ぼくが福岡高校のヨット部に入って三カ月以上がたった。いろいろなことがあったけれど、ヨット部は楽しい部だし、ヨットはやりがいのあるスポーツだと思うのでこれからもがんばろうと思う。

(S級) 前田 健志

まだ、まったくできないけど、もっといろんなことを覚えて、他の人に敗けないように努力してがんばりたいと思う。

(S級) 花田 克浩

努力して先輩たちのようなヨットマンになりたい。インターハイを目指してがんばるつもりです。

(S級) 神武 健一郎

今、ぼくは、ヨット部で充実した日々を送っている。いろいろなヨットの技(タック・ジャイブ)等を身につけることは、ぼくにとって至難の業だが、がんばっていききたい。ぼくは、よく先輩におこられて、迷惑をかけているけど、これからもよろしくおねがいたします。

(S級) 吉松 貴博

ヨット部に入部して早くも約四か月近くすぎりました。最初先輩の勧誘で入部したヨット部だけど初めて自分でヨットを動かしたときは感動しました。そして今では結構楽しさが分かってきました。普通こんな事はなかなか経験できないので自分の生涯のいい思い出になると思います。今の一年生は男女18人とかなり的人数なのでレギュラーになるのも容易ではないと思います。しかし先輩たちも一生懸命で丁寧に教えてくれるので早く上達してレギュラーになりたいと思います。

す。まだ今はヨットのくわしいところまでよく分からないので早く先輩達に教わってもっとヨットの楽しさを理解し、他の高校に比べて少し劣っている面もあるので早く追いつき追いこして僕たちの代でインターハイに行けるように努力したいと思います。

(S級) 池田陽子

みんなに、練習がついていけるように、普段から努力していかうと思います。合宿も、必死に頑張つて、うまく乗れるようになりたいです。そして、先輩方が、出られなかったインターハイに行きたいです。

(S級) 山口陽子

入部当初にくらべると、今はだいぶヨットになれてきたと思う。女子部員は少ないので苦労する面も多いと思うが、なるべく男子と対等な立場でがんばりたい。そして、先輩方が果たせなかったインターハイ出場を目指して、これから練習していかうと思う。

(S級) 山田葉津子

男子と一緒にトレーニングをするのは、きつけれど、ヨットに乗ることが、今、一番楽しいので、そのため頑張っています。

そして、二年後は、インターハイと、国体に出場できるように努力したいと思います。

(FJ級) 古賀宜文

このヨット部は、部員が多くてそれもおもしろい奴ばかりでとても楽しいのですが、人数が多い分「ぼくは三年になっても乗れないのじゃないか」とか思うとちょっと不安です。三年になつてちゃんと船に乗れるようにいっしょうけんめいがんばろうと思います。

(FJ級) 岡村誠之

入部してからもう3ヶ月がたち、やっと、部活動と勉強の両立にも慣れてきました。今は、体力的にも精神的にもまだまだ弱いので、まずは「自分」に負けないうように、積極的にかんばります。

(FJ級) 久世泰士

今までにヨットには数回乗せてもらったが、タックが素速くできない。他にも、うまくできない事が多く残っている。多くの事を身につけて、先輩の足手まといにならないようにがんばっていききたいと思う。文武両道も努力していききたい。

(FJ級) 柴田邦彦

成績がある限度を越えるまでは続けていききたいと考えている。いきなり成績のことを言うのは自分でもいやだが、この点をはっきりさせておかなくては、文武両道は成り立たないと思う。現状維持は役退である。(古狸の言葉より)

(FJ級) 牧野圭司

ヨットのヨの字も知らなかった初期と比べてヨット部に入って3ヶ月たった今、顔も黒くなり体力もそれなりについてきた。ヨットに関しての技術はいまいちなので、これからもっと練習して、ヨットをうまく乗りこなせるようにがんばりたいと思う。

(FJ級) 岩本将司

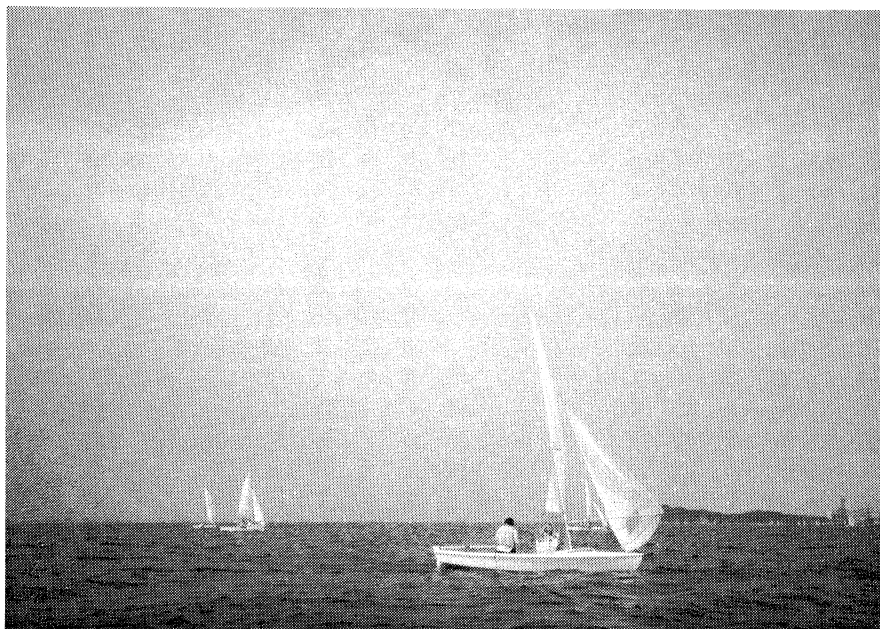
僕は、このヨット部に入るまでヨットの事を全く知りませんでした。しかし、最近になってやっと色々な事を理解できるようになりました。これからはもっともっと上手になるために頑張りたいと思いますので先輩方、よろしくお願いします。

(FJ級) 西江秀夫

最初はヨットを全く知らなかった。でも今は、ほんのちよっぴり知った。これから、たくさん練習して、ヨットのことをいっぱい知りたい。そして、早く上手なヨットマンになりたい。

(FJ級) 杉田泰之

ヨット部に入って約3ヶ月が過ぎた。やっと慣れていろいろなことを覚えることができた。しかしまだ分からないことの方が多いため、さらに努力して最後まで続けたいと思う。



小戸沖

編集後記

この「かざいと 創部40周年記念号」の発刊にあたっては、多く関係の方々並びにOB会員の皆さんに一方ならぬご協力をいただきました。

心から、お礼を申し上げます。

編集内容はもっと整理し、将来を展望したものにすべきであったと、力量と努力の不充分さを痛感しております。

ただ、我福高ヨット部を「絆」とする多くの方々の情熱の一端をここにとどめ、これからの部並びにOB会発展への若い力につながれば、と思えます。

40周年記念事業実行委員会